

芦辺町文化財調査報告書第1集

京塚遺跡

1983

長崎県芦辺町教育委員会

芦辺町文化財調査報告書第1集

京塚遺跡

—長崎県壱岐郡芦辺町所在の近世墓群—

1983

長崎県芦辺町教育委員会





発刊にあたって

このたび、当町にあります京塚遺跡の、緊急発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

京塚遺跡は、古くから栄えたと思われる宍戸の島のほぼ中央部にあり、中世初頭にかけての事情を物語る可能性のある遺跡として、注目を引いたものであります。

文化財は、歴史や文化の正しい理解のために、欠くことのできないもので、かつ、将来の文化の向上、発展のための基礎となるものであります。このため、私たちの祖先が残し伝えてきた文化遺産はこれを保護し、子孫に継承してゆかなければならぬと思います。

さて、本遺跡は、昭和57年5月から6月にかけて調査を実施し、出土した遺物によって、江戸時代初期から中期にかけての墓地である事が確認されました。

この報告書は、その調査結果についてまとめたものであります。本書が、京塚遺跡のみならず、広く宍戸全般の遺跡についても御理解をいただく資料となるよう、御活用いただければ、甚だ幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、多大な御援助、御協力をいただきました方々に厚くお礼を申し上げまして、本調査報告書発刊のことばとさせていただきます。

昭和58年3月

芦辺町長 山口 定徳

調査関係者

芦辺町教育委員会	大川 稔	教育長
	今西 国善	教育次長兼社会教育係長
	立石 勝治	学校教育係長
	原田登志子	事務吏員
	川上 忠	派遣社会教育主事
	清水 正博	社会教育主事
	加藤 弘安	社会教育主事補

長崎県文化課	田川 雄	主任文化財保護主事
	安楽 効	文化財保護主事
	藤田 和裕	"
	宮崎 貴夫	"
	片山巳貴子	文化財調査員
	松尾 泰子	"

調査協力者 山本 順市・山本 孝子・山木 正幸・大曲 重義
永元 恵治・平木 京子・佐々木サダメ・高下 ジツ
官坂組 宮坂基太郎・壱岐教育事務所

調査内業 村田 幸子・本田 邦子・大沢加奈子

このほかにも、壱岐郷土館の横山順氏、勝本町教育委員会の須藤資隆氏の助力を得た。九州大学文学部考古学研究室の西谷正先生には、現地でお教えいただくことがあり、本報告書中の陶磁器については、長崎県立美術博物館の馬場強先生に教えを受けた。また、調査に協力していただいた、芦辺町の龍藏寺住職植村高義氏には、「竹翁首座と天徳庵」の玉稿をお寄せいただいた。調査中、調査員の宿舎となった、吉見屋の方々にも大層お世話になった。多くの方々の御協力により、無事、調査を終えることができました。ありがとうございました。

最後になったが、芦辺町教育長大川稔氏は、昭和58年2月4日、心臓病のため執務中に他界された。調査員一同、心から御冥福をお祈りいたします。

例　　言

- 1 本書は、昭和57年度の国庫補助を受けて実施した、長崎県壱岐郡芦辺町所在の京塚遺跡緊急発掘調査報告書である。
- 2 主な調査対象は墓地であったが、石組通構・土塗などを含めて京塚遺跡と呼ぶこととした。
- 3 調査は、芦辺町教育委員会を主体とし、長崎県文化課がこれに協力して実施した。
- 4 本書の執筆は分担して行い、各項の執筆者は本文に記したとおりである。
- 5 持ち運びの可能であった石塔類は長崎に運び、実測・写真撮影を行って、できるだけ多く本書に収録するようにした。
- 6 本書関係の写真撮影は藤田が行った。
- 7 本遺跡に残する図面および写真類は、長崎県文化課が保管の任にあたっているが、遺物はできるだけ早く芦辺町に返還の予定である。
- 8 本書の編集は藤田による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 京塚遺跡の立地と環境	2
(1) 地理的位置	2
(2) 壱岐の地質	3
(3) 古墳の遺跡	4
(4) 15世紀から17世紀の壹岐	6
III 調　　査	8
(1) 調査の概要	8
(2) 造　　構	10
武	10
石組造構	34
大　　土　　壠	37
(3) 造　　物	38
墓地出土の陶磁器	38
銅　　錢	42
不明金属器	43
散　　珠	44
その他の土器・陶磁器	45
石　　塔	49
IV ま　　と　　め	60
—付— 竹翁首座と天德崖	64

挿 図 目 次

第1図	京塚遺跡位置図	2
第2図	毛岐島地質図	3
第3図	京塚遺跡周辺の地形と遺跡分布図	5
第4図	15世紀から17世紀の毛岐島地図	7
第5図	京塚遺跡周辺地形図	8
第6図	京塚遺跡遺構・墓地配置図	9
第7図	第1号墓実測図	11
第8図	第2号墓実測図	13
第9図	第3号墓実測図	15
第10図	第4号墓・第5号墓実測図	17
第11図	第6号墓実測図	19
第12図	第7号墓実測図	21
第13図	仏像形石塔実測図	22
第14図	第9号墓実測図	23
第15図	第10号墓実測図	24
第16図	第11号墓実測図	25
第17図	第12号墓実測図	27
第18図	第13号墓実測図	28
第19図	第14号墓実測図	30
第20図	第15号墓実測図	31
第21図	第16号墓実測図	32
第22図	石塔実測図	33
第23図	石組遺構実測図	35
第24図	大土壙実測図	37
第25図	墓地出土の陶磁器実測図(1)	39
第26図	墓地出土の陶磁器実測図(2)	41
第27図	銅錢拓影・不明金属器実測図	43
第28図	数珠実測図	44
第29図	その他上の上器・陶磁器実測図	47
第30図	宝塚印塔 相輪A実測図	52
第31図	宝塚印塔 相輪B実測図	53

第32図 宝鏡印塔 柱輪B・笠尖測図	54
第33図 宝鏡印塔 笠・塔身実測図	55
第34図 兰蓋印塔 基礎尖測図	56
第35図 宝鏡印塔 基礎・無縫塔 塔身・五輪塔 空・風輪実測図	57
第36図 五輪塔・自然石板碑実測図	58
第37図 自然石板碑実測図	59

表 目 次

第1表 京塚遺跡出土 銅錢一覧表	43
第2表 宝鏡印塔笠 回転の高さと角度の関係	50
第3表 自然石板碑一覧表	51
第4表 墓墓方位表	60
第5表 京塚遺跡 葦塗一覧表	61
第6表 京塚遺跡 墓墓一覧表	62

図版目次

図版1	京塚遺跡全景	69
図版2	調査風景	70
図版3	調査風景	71
図版4	調査風景	72
図版5	第1号墓	73
図版6	第2号墓	74
図版7	第3号墓	75
図版8	第4号墓・第5号墓	76
図版9	第6号墓	77
図版10	第7号墓	78
図版11	第9号墓	79
図版12	第10号墓	80
図版13	第11号墓	81
図版14	第12号墓	82
図版15	第13号墓	83
図版16	第14号墓	84
図版17	第15号墓	85
図版18	第16号墓	86
図版19	池 壇	87
図版20	墓 壇	88
図版21	石塔・仏像形石塔	89
図版22	石組遺構	90
図版23	大 土 壇	91
図版24	遺物出土状況(1)	92
図版25	遺物出土状況(2)	93
図版26	出土遺物(1)	94
図版27	出土遺物(2)	95
図版28	出土遺物(3)	96
図版29	出土遺物(4)	97
図版30	出土遺物(5)	98
図版31	出土遺物(6)	99

图版32 出土遗物(7).....	100
图版33 出土遗物(8).....	101
图版34 出土遗物(9).....	102
图版35 宝箧印塔 枢輪.....	103
图版36 宝箧印塔 枢輪·笠.....	104
图版37 宝箧印塔 笠.....	105
图版38 宝箧印塔 笠.....	106
图版39 宝箧印塔 塔身·基磈.....	107
图版40 宝箧印塔 基礎·無縫塔 塔身·五輪塔 空·鐵輪.....	108
图版41 五輪塔火輪·水輪·石塔部分·自然石板碑.....	109
图版42 自然石板碑.....	110

I 調査に至る経緯

壱岐の島には個々の屋敷の片隅や、ちょっとした山の一隅に、必ずといってよい程質素な墓地の所在を見ることが出来る。そして墓の中に、ひっそりと祀られることなく忘れ去られているこれらの中多くは、丸い自然石を集めて墓標がわりにしたものや、板状の碑を丁寧に積み上げ自然石の墓標をたてたものなど、独創的形態を保っている。

島のほぼ中央部、国分寺址に近接する京塚の墓碑群も、以前から中世頃まで遡るのではないかと疑念がもたれていた。その没落になつたものは、壱岐中世史に登場する「波多氏」である。唐津岸岳城主波多宗無が郷ノ浦に龜尾城を築いてから、平戸松浦氏が擡頭するまで壱岐の支配権は波多氏に握られていた。その波多一族の「波多院」のものと考えられる「降公」の文字を刻んだ拝塔が、隣接する山林内に存在したからでもあった。壱岐に度々米島されていた九州大学の西谷正氏も、この事實に着目し、現在している墓碑群の中に、古い時期に屬するものがあるのではと注意を喚起されていた。

1980年(昭和55)地元の建設業宮坂組は、資材置場建設のため墓地の所在する山林を買収、開発に着手した。まず立木の伐採を行ったところ、多くの積石状の墓石、五輪塔などの石塔群が確認された。かかる事態を予想していた壱岐史跡顕彰会の有志は、直ちに墓地の範囲確認と倒れた墓石の復元作業を行い、関係者に現地保存を要請した。町教委は県文化課と今後の対応について協議を行い、現地の状況を把握することとなつた。同年12月5日県文化課では、たまたま原の辻遺跡で調査に従事していた安東を見地に立ち会わせた。現地では町の要請者と現状保存の方法で解決されないか協議したが、業者の方は、調査後の供養のため一部の場所提供には応じてもよいが、全体保存は無理との回答を得た。その後発掘調査の必要性は避けられないと判断、原因者である宮坂組にも調査に対する理解を求め、調査費用の問題についても話し合つた。その後事態は進展しなかつたが、地元の龍造寺住職村高義氏らの努力もあり、付近の明治初年廃寺となった大徳院とのかかわりも考えられるとして、緊急発掘調査を実施することになった。調査計画は昭和57年度認可補助事業として出され、区および県費の補助金を受け、調査員は県文化課から派遣することで、町の事業として行われることになった。また人骨などの山上に備えて、長崎大学医学部にも協力が求められ支援体制を組んでいただき、1982年5月、6月本報告調査の運びとなつた。

(安東)

II 京塚遺跡の立地と環境

(1) 地理的位置

京塚遺跡は、長崎県壱岐郡芦辺町田分本村解京塚1259番地にある。

壱岐は、九州と朝鮮半島との間にあり、古くから対馬とともに、日本と大陸とを結ぶ飛石的な役割りを果してきた島でもある。朝鮮・対馬間約50km、対馬・壱岐間も約50km、壱岐と九州北岸までは約20kmで、天気の良い日には、それぞれの間は明瞭に眺望がきく。このように、平和時における便利な交通路は、一方、緊張関係が生じた時の最前線になる可能性を持っており、「刀伊」の入寇や、元寇の被害を受けたことがそれを示している。

京塚遺跡は、この壱岐の島の中央部からやや北側に寄って位置しており、芦辺町の西側にある。近隣に、島の中心と伝えられる「へそ石」があり、田分寺跡も近い。周囲は、標高100m前後の準平原的様相を示す。遺跡のすぐ北側を、東の芦辺浦・瀬戸と西の湯の木を結ぶ、一般県道湯の木・芦辺線が東西に走り、西側1.4kmほどの所には国道382号線が郷ノ浦・勝本門を南北に走っている。北側は、谷江川の支流初尾川の水脈となっており、南側は刈田院川の上流で、糸流が、西に向いて流れている。遺跡は、この両水系にはさまれた部分の南斜面に立地している。

遺跡の、道路を挟んだ北側の畠の端には、享保11年（？）の「花翁」の銘のある墓など、江戸時代の墓地がある。西側の林の中にも江戸時代の墓地があり、それらの北端部、道路のそばには「謙公」の揮塔があり、これは波多藤（～1555）のものといわれている。東側の林の中にも墓地がある。

南側には、「壱岐名勝図誌」に、「西原山天徳庵」と記された寺院の跡と伝えられる場所がある。現在は竹林となっているが、「寛文四・甲辰」の年号のある大石碑などが祀られている。



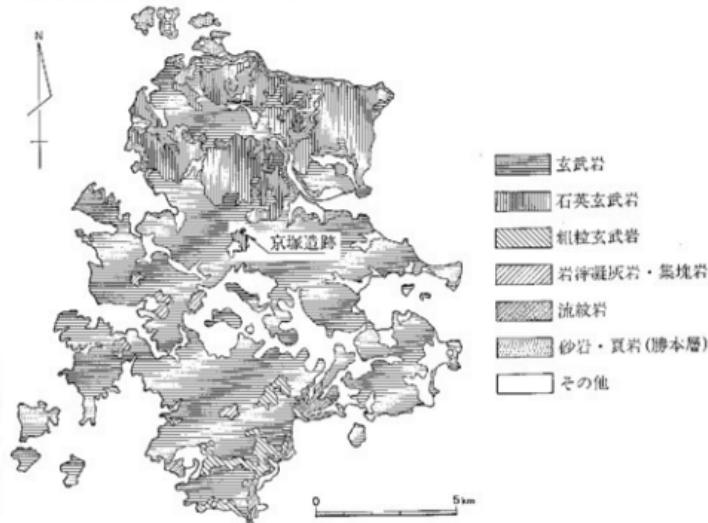
第1図 京塚遺跡位置図

(2) 壱岐の地質

島の主要部は、東西約15km、南北約17kmほどで、海岸線の入りはかなり多く、29の小島を合わせて面積は約139km²である。島の基盤は第三紀層で、表面は標高100m前後の低平な溶岩台地となっている。対馬とは対照的な地形を呈し、険しい山が少なく、島の最高地の岳の辻でも212.9mを測るにすぎない。

大まかに、島の表層地質について見ると、ほぼ中央から南側の櫛鉾川流域には、沖積低地堆積層があり、その周辺の丘陵地帯等には、凝灰質砂岩や泥岩の半固結堆積物層、いわゆる「老松層群」が分布している。北部には、島の英縞をなす古第三紀層の、砂岩と頁岩の互層である勝木層があり、部分的に流紋岩の露頭が見られる。南部から西部には、郷ノ浦火山噴出物が散在し、南部海岸地帯には黒雲母流紋岩があつて変質安山岩を覆っている。これら以外はほとんど玄武岩で、島の北部には石英玄武岩が多い。一般に灰色を呈し、緻密で、板状の大きな岩塊を掘り出せるため「鬼の岩屋」などの古墳に利用されている。南部には粗粒玄武岩があつて沈積岩や安山岩類を覆っている。青灰色・暗緑色に見え、現在は墓石などの石材としている。これら以外の玄武岩が溶岩台地となり、島の表面をゆるやかに形作っている。

京塚遺跡の墓石・宝鏡印塔に用いられている石材は全て島内の石で、島外から持ち込まれた石材は認められない。宝鏡印塔の合石のうちに3点、流紋岩のものが認められたが、京塚遺跡の北々西3kmほどの、神通の辻からのものと思われる。



第2図 南岐島地質図

(3) 周辺の遺跡

壱岐では、古くは弥生時代以前の遺跡については知られていなかったが、昭和50年以降、島内各地で先上器時代の遺物の発見があつた。カラカミ遺跡周辺でのマイクロ・コアの発見^(註1)を契機とし、原の辻遺跡周辺でも発見が続き、良好な状態での包蔵地も確認されるに至った。^(註2)

縄文時代の遺跡も多くは知られていなかったが、芦辺町の青島には貝塚があり、貝層の中から完全な形の壺や石器の一部が出土した、と伝えられている。縄文時代か弥生時代の生活址と考えられる。また、近年、郷ノ泊町名跡において、縄文時代前期・中期の土器、勝本町松崎においても同じ頃の遺物の発見がなされている。今後さらに新例の増えることが期待される。

弥生時代の遺跡としては、原の辻遺跡・カラカミ遺跡が著名である。原の辻遺跡は、弥生前期から終末期にかけての、幡綿川流域を生活の基盤とした人々の遺跡と思われるが、カラカミ遺跡の場合、農耕の仕事に海の生活を色濃く残した遺跡のように考えられる。

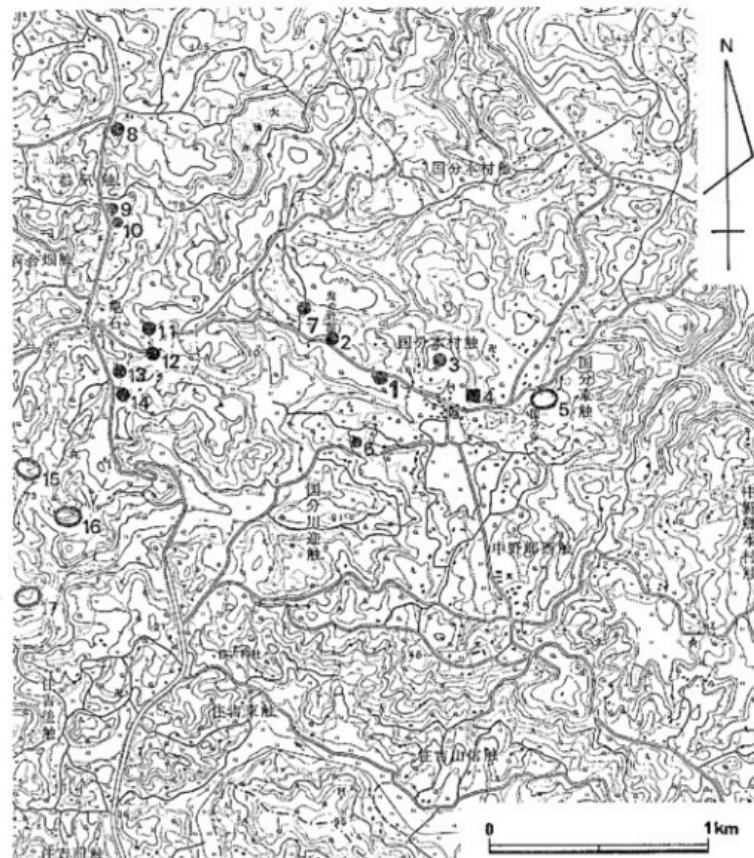
壱岐は、長崎県内では特に古墳の多い地域である。江戸時代に、領主松浦家は、幕府の命により古墳の調査を実施し、283基の古墳を数えているが、現在、未確認のものを含めると300基をこえるものと思われる。そのうちでも特に、京塚遺跡の周辺から西側にかけて集中しており、この近辺が古墳時代の壱岐の中心的地域であったことは、ほぼ疑いのないところであろう。

京塚遺跡周辺の遺跡の分布は、第3回の如くである。1～7までは芦辺町、8～17は勝本町になる。1が京塚遺跡で、この周辺の畠地などには須恵器片などが散布しており、古墳時代からの墳墓あるいは生活址のあった可能性も考えられる。2は鬼の岩屋古墳で、壱岐では最も大きな古墳である。墳丘の直径は50m強で、石室は玄室と三つの前室からなっており、現存長は17mほどある。昭和36年、県指定の史跡となっている。3は国分寺跡で、昭和49年県指定の史跡となった。現在、礎石が残っている。4は壱岐氏の居館があったとされる場所である。7の国分兵頭古墳は、島内でも五指に入る、といわれる大きな円墳である。横穴式で、二つの前室を持ち、全長約11m、玄室の高さは3m弱である。8は掛木古墳。これも大きな古墳で、南に向いて開口する円墳である。玄室と二つの前室を持ち、現存長13m余。玄室内には削抜式の家の形石棺がある。石棺の長さは180cm、幅80cmで、縁は12cm強の厚みを持つ。地中に埋もれ、約15cmほどが表われているにすぎない。蓋は、幅94cmであるが、%ほどを欠いている。11の笠塚古墳もかなり大きく、石室の現存長15mほどある。この近辺には、まだ多くの古墳があるが、本格的に調査されたものではなく、副葬品・規模などについては不明な点が多い。17はカラカミ遺跡で、先述したように、壱岐島内の弥生遺跡では、原の辻遺跡とならんで著名な遺跡である。

註1 昭和50年、半円錐形石核が壱岐教育事務所福田敏氏により採集された。

註2 長崎県教育委員会「原の辻遺跡(III)」1978

註3 芦辺町「芦辺町史」1978



第3図 京澤司跡の地形と遺跡分布図

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 京塚遺跡 | 2 京の岩戻古墳 | 3 国分寺跡 |
| 4 佐波氏居館跡 | 5 國分寺跡 | 6 鮎名古墳 |
| 7 五分兵衛古墳 | 8 挿木(懸木)古墳 | 9 芥の木古墳 |
| 10 北白川宮古墳 | 11 筒塚古墳 | 12 夫婦丸尾古墳 |
| 13 亀石古墳 | 14 二塚古墳 | 15 牛神遺跡 |
| 16 国竈遺跡 | 17 カラカミ遺跡 | |

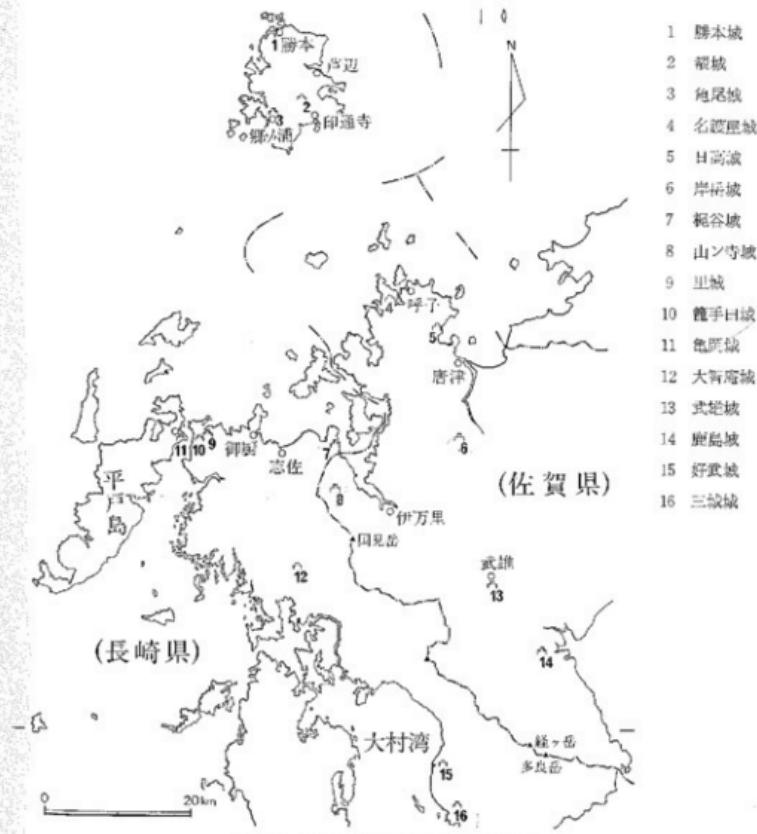
(4) 15世紀から17世紀の壱岐

大和朝廷の朝鮮半島進出の足がかりとなった壱岐・対馬であるが、白村江の戦いで唐・新羅との連合軍に敗れて緊張が生じ、筑前的第一線として訪人を駐屯させ、烽を置いて警戒を厳重にすることとなった。その後、9世紀には数回の外敵のため被害を受け、11世紀には「刀伊」の入寇によって大被害を蒙った。このころ、松浦氏の祖とされる源泰の子、久が松浦地方に向し、周辺に勢力を広げはじめたといわれている。13世紀に至っては、壱岐は史上有名な元寇を二度にわたって受け、激減的な打撃を蒙った。壱岐はもともと大宰府の直轄地であったが、鎌倉時代になって武家政権が確立されるにおよんで、守護として武藤氏が任命され、守護代として平長隆が在局していた。しかし、元寇のち、松浦党が進出しはじめ、14世紀には松浦党の五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されていたが、文明4年（1472）、同じ松浦氏の一族である岸津・岸城・主波多下野守泰が攻め込み、先の工兵を滅ぼし、亀尾城を築いて壱岐全島を領有するに至った。泰のあと下野守興は延徳2年（1490）に襲殺し、次の壱岐守盛は永永3年（1523）にそのあとを襲い、天文11年（1544）に没した。盛のあとが三河守信時で、天文11年に城主となって同24年（1555）に没した。この信時には嗣子がなかったため壱岐城代の守成の子波多隆を岸岳城主に迎えようとした。これは、人老職であった日高資が家老たちと計り、信時の世継ぎにすることを決したのであった。一方、信時の後胤真芳は、自分が島原の有馬に嫁していた時の了、蘿童丸を世継ぎにしようと望んでおり、日高氏たちとの間に争いが絶えなかった。このため真芳は、波多隆が壱岐城代になっていた時、壱岐の六人の代官に依頼して、隆を亡き者にしようと謀った。要請を受けた六人の代官は、弘治元年（1555）4月、隆を追って自害せしめ、翌年には隆の弟重をも殺すに及んだ。そして、弘治元年以来11年間にわたって、六人衆と呼ばれた代官たちによる壱岐の分治支配が続くこととなった。一方、岸津城では、真芳が自分の了蘿童丸を信時の世継ぎに決し、これに対する鶴田・日高氏らとの講をいよいよ深くしていった。真芳は、日高資こそ自分と蘿童丸に反対する主謀者である、としてこれを殺した。ために、資の子、甲斐守喜は父の仇を討つことを決意し、その機をうかがっていた。永禄7年（1564）12月もおしまった時、喜は不意に乱を起して岸岳城を奪い取り、鶴田氏を迎えて上松浦党の盟主と仰ぎ、近隣や壱岐に勢力を示すようになった。一方、日高氏に追われた真芳たちは、その後佐賀の竜造寺氏、島原の有馬氏などにすがり、岸岳城奪還の援助を請い、永禄12年（1569）、竜造寺氏の手により岸岳城を奪いかえしてもらった。これに対して日高氏も、平戸の松浦氏に援助を頼んでいたが、わずかの差でまにあわずに敗れ、身ひとつで壱岐に逃れた。翌元龜元年（1570）1月、城代波多政を殺して自ら壱岐守護となつた。元龜2年（1571）、岸岳城の波多氏は、竜造寺氏や対馬の宗氏と謀って壱岐奪還の計画を実行したが、平戸松浦氏の保護を受けた日高氏はよく防禦して擊退した。これ以後、日高氏は松浦氏に臣従すこととなつた。

全国統一をなしとげた豊臣秀吉は、朝鮮出兵を企て、肥前名護屋を根拠地とし、壱岐・対馬に出城を築いて朝鮮との戦争を始めた。壱岐では、勝本の池に、平戸の松浦鎮信が楽城にかかり、有馬・大村・五島の各氏の援助により、短期間で完成させている。しかし、秀吉の出兵は失敗に終り、江戸時代になると、壱岐城代役の者によって松浦氏の壱岐支配が続くこととなり、波多氏以来の、政治・軍事の中心であった鬼尾城を本拠としての統治がなされた。

以後、明治維新を迎えるまで松浦氏の支配下にあった壱岐は、廃藩置県を経て長崎県に含まれることとなり、現在に至っている。

(藤田)



第4図 15世紀から17世紀の壱岐関連地図

III 調 査

(1) 調査の概要

京塚遺跡の調査は、前半が昭和57年5月10日から26日まで、後半は6月1日から18日まで、合計35日間実施した。当初の調査対象面積は約200畝で、墓域のあった11基を調査する予定であったが、表土を剥いで清掃する段階で、拳大から入頭大の石で礎石課のように築いた部分が認められ、これらを含めると16基となつた。しかし、うち1基は後口、墓ではないことがわかり、最終的には15基を調査した。このほか、墓域の北東側に寄せられていた宝鏡印塔の大方を取り除いて清掃したところ、堂様の板石が十数枚立てられ、宝鏡印塔の台石・笠・塔身などが散乱した、幅1m～2.5m、長さ9mほどの石組状の遺構が出露したため、この部分も調査の対象に加えた。さらに、調査の終盤に入ってから、第2号墓と第4号墓の間に幅1.8m、長さ4.3m、深さ0.8mほどの大きな土壙が検出された。これは後口、歴土を取ったあとである可能性が強いことがわかったが、写真撮影と実測を行つた。

調査は、以前に伐採してあった草木を、再度切り払い、清掃することから開始した。このあと、調査区域全体の写真撮影を行い、さらに、北東側から各々の墓と、地表面の清掃をした。



第5図 京塚遺跡周辺地形図(アミ目の部分が京塚遺跡)

この段階で、基盤を持たなかったため、それまで基部に入ってなかつた積石塚様の墓を確認した。その後これらの墓の位置と地形の平板測量をして、50cm間隔の等高線を入れた。清掃の終了した墓からそれぞれ正面・側面の写真撮影を行い、石の大きさで実測にかかった。尖滅は、平面図と、略東西、南北線の断面および断面にかかる見とおしを測ることとした。第10～第13号墓、第15・第16号墓は、墓底は持たなかったが、小さな石を集めしており、その間に木根も入り組んで石を噛んでおり作業はかなり手間だった。第1～第7号墓、第9・第14号墓は墓底を穿っており、先の、墓底のないものとは上部構造ともあわせ、明らかに二種類の性格のものの存在を思わせられた。

後半の調査の第1回目、6月2日は午後から雨が降りだした。梅雨期も近いことから、墓をおおって実測作業にさしつかえのない程度の大きさのテントを、町教委に頼んで設営してもらうことにした。また、頼んでいた応援の入員が3日到着、4日から実測に加わることになった。

第9号墓から、江戸時代前駆の皿・盃を削ぎした人骨が出土しはじめたが、非常にもろく、清掃中にも損傷を受けて小片になるほどであった。このため、長崎大学医学部解剖学第二教室に電話で連絡をとり、出土状況の写真撮影、岡化終了後、土ごとまとめて取り上げた。

それぞれの墓の調査をほぼ予定のペースで進め、終了してから北京部の石組造構の実測にかかり、この部分も1/6で平面・断面図の作製を終えた。さらに、先述した大きな土壇の実測を終えて、持ち帰りが不可能と思われた石塔の実測をし拓本を取って現場での作業を終了した。

(藤川)



第6図 京塚追跡造構・墓地配図図

(2) 遺構

遺構の中心となるものは墓地である。当初は草木のためさほどとは思わなかったが、清掃が進むにつれ、礫石塚のように思われる盛り上がりが出現し、さらに、宝鏡印塔の部分がかなり多量に散在している状況には、少なからず驚かされた。しかし、完全に浮いた状態の石や宝鏡印塔を取り除いたところ、墓域北東部の、自然の傾斜面にある石組状の遺構と、小形の墓が近接してあることがわかった。

調査は、最初からの方針どおり、墓からはじめ、終了後に石組遺構にかかった。石組遺構の一部は、墓の可能性も考えられたので、それとおぼしき部分の断面図を取るようにしたが、下部には何らの遺構も認められなかった。

第1号墓（第7図・図版5）

墓域の最西端に位置し、第2号墓・第3号墓とともに一群を形成している。比較的大形の自然石を用いて墓壇を作っている。蓋板は調査以前に取りはずされてしまっていた。部分的に小さな根塊は認められるが、大きな破壊は受けておらず、旧状を良く留めている方であろう。

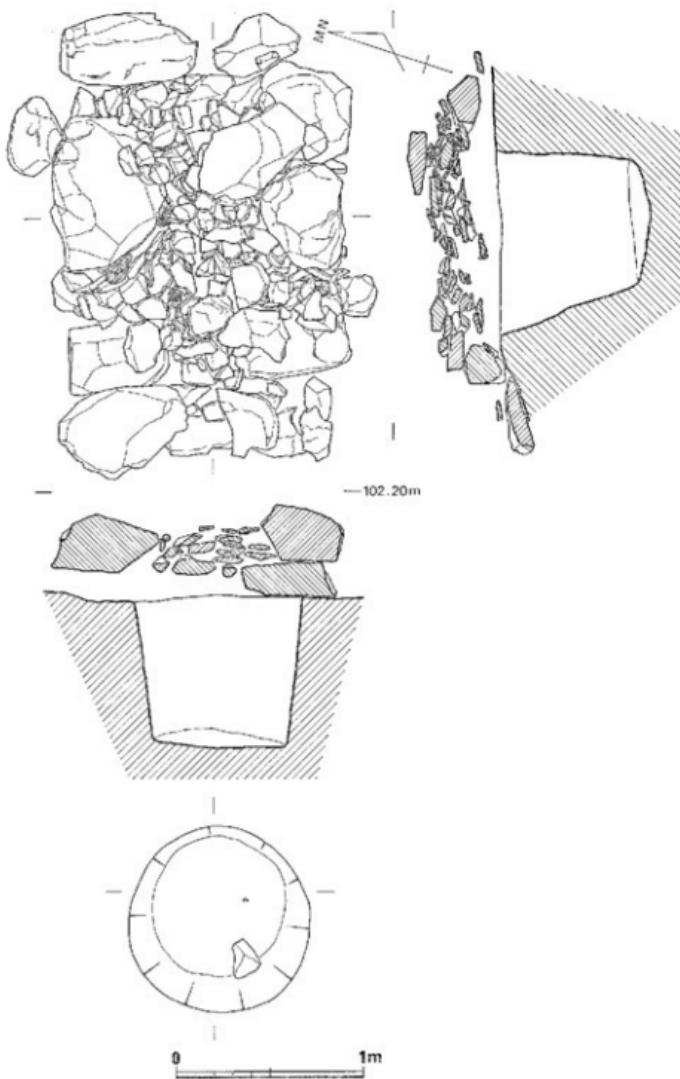
墓壇の法量は、東西2.1m、南北1.5mを測る。四隅には100cm～120cm位の大形の自然石6個を配置して基礎石としている。墓壇そのものが北から南へゆるやかに傾斜をもつ丘陵斜面上に形成されているため、墓自体も僅かながらの斜度をもっている。そのためか基礎石とした外側に控え石を4個配置し補強している。内側には扁平な掌大の角礫を柱作用に間隙がないくらいびっしりと約30cm位積みあげている。この中から僅かではあるが、青磁片、須恵器片が出土している。

蓋板は前述のごとく、調査前に取りはずされてしまっていたが、その位置は墓壇のほぼ中央部にあったものと考えられる。断面図に見られる中央部の僅かな凹みはその跡であろう。それからだけの推察によると、小形の墓壇と考えられる。しかも柄部の根固めを行っていない單に挿入いただけのものようである。

下部構造の墓壇は焼塙の中央部に張られており、プランはほぼ円形で、形状は円筒形を呈している。その大きさは、上端部で東西1.0m、南北0.95m、深さ0.8mを測る。墓壇壁は、西侧の斜度はゆるやかであるが、他は垂直に近い。底部は中央部で僅かに凹む。遺骸の埋葬用具としては、その遺存体の検出はないが木製桶の使用と考えて差し文えあるまい。墓壇中には柔軟で目のかい、粘性の弱いバサバサした土が充満しており、空隙はなかった。

人骨は検出しなかったが、副葬品として、墓壇底部中央より約10cm東南の位置から寛永通寶が1枚出土した。俗にいう三途の川の渡し貨であろうが、現在でも芦辺町では死者に酒と三文銭を持たせる風習が残っており、同じ思想の系譜が見られる。

（田川）



第7圖 第1號墓穴測圖

第2号墓（第8図・図版6）

墓域の西端、第1号墓と第3号墓の間に位置する。基壇は北東と南東隅が連れていっている以外は、原形をとどめる大形の方形積石墓である。

基壇は、東西軸が2.3m、南北が2.7mの方形状を呈する。夥しい小石をなかにつめ、長さ50cm～80cmほどの石を横に立て、方形に囲んだ積石墓である。上面は地上から60cm～70cmの高さがあり、頂部がやや盛りあがっている。積石は上部20cm～30cmほどを覆っているが、内側は地中まで50cmほど石がつめこまれている。積石の下はカクカクした柔かい茶褐色土が30cm～40cmほどあり、黄褐色の地山を掘り込んで基礎がみられる。また大石で方形に囲み、茶褐色土を入れ、その上に積石したことがわかる。地山は南側と西側が弧形され、「L」字形に段を有しとくに西側は25cmの比高をもつ。

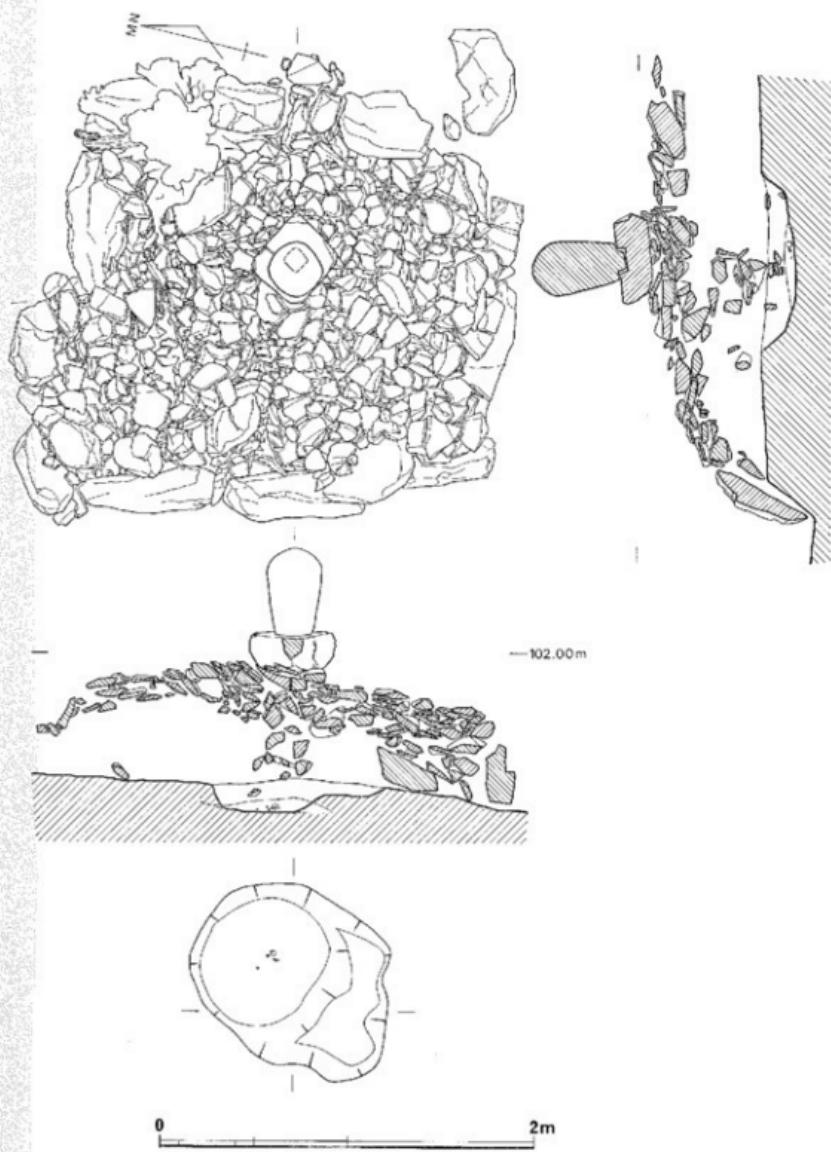
墓標（第22図）無縫塔で、中心よりやや東にずれた場所に置かれ、正面は基壇の南西隅方向を向き、基壇と対角線上に置かれた格好になっている。塔身は頂部がやや尖り、横断面は丸味をもつ方形で下方は稍円形に近い。下面是平坦ではなくやや上りノミ痕が残る。納は四角で先が細くなる。身の長さは43cmで、納まで加えると47.5cmを測る。最大幅は28.5cm、下面是20cm×16cmを測る。納は9.5cm角で、先端は6cm角である。下面から15cm上に長さ6cmの「一」形の切り込みがみられる。台座は方形で、断面は上面が大きい台形状を呈する。裏面は粗い仕上げのままである。上面に長さ6.5cmの「一」形の切り込みがみられる。上面は37.4cm×35.6cm、下面は34.5cm、高さ20cmを測る。受穴は上面が10cm×9.5cm、下面は8cm×7.8cmを測る。

墓標は、基壇の中心から北東に少しずれた位置にある。南側がやや掘りすぎたため平面がいびつな梢円形状になっているが、本来は底面にそった径80cmほどの円形であったと考えられる。底面径は70cm×70cm、深さ15cmを測る。底面近くにメノウとガラス製の玉がまとめて検出された。散珠と考えられ、メノウ製玉1、ガラス製小玉11個の出土をみたが、入骨は検出されなかった。墓標が浅いのが気にかかるが、断面では中央部の石が落ち込んでいる状況がわかるので、茶褐色土中に墓標があったのを見たがしたことも考えられる。それでも底面から60cmほどで積石上面に至るので、小さな桶塗であったことも推測される。

地山を略形して「L」字形に造りだし、円形に基礎を掘り、桶柱を掘えて茶褐色土の盛土をしたのち、積石をおこなったことが考えられる。積石墓に利用された石は全て玄武岩である。

出土遺物には、積石中に土師質の火鉢片と寛永通寶1枚がみられた。

（宮崎）



第8図 第2号基盤測区

第3号墓（第9図・図版7）

墓域西端に三基並んだもののうちの南端のもので、西側に向いている。南側と東側は崩れているが、北側、西側は原形を留めている。

平面図では、東西1.8m、南北2.0mほどあるが、南・東側の崩壊する以前は約1.5m前後の大きさの、ほぼ正方形であったと思われる。四辺には、ひと沿え以上もある石を混じえ、大きめの石を横にして据え、その上に2~4段の石を積んでおり、高いところでは地表から0.6mほどある。四辺の積石の内側に、人頭大から拳大のやや扁平な石を詰め込んでいるが、無造作に入れたよう空間が多い。土も入っていないかった。四辺の石を積みながら小石を入れ、さらにまわりの石を積んだものと考えられる。第9図の、墓標の下部は空間が多いが、調査時にはここも周囲と同じ状況で、小石が詰まっていた。まむしを捕まえる時に石を除いたため、空白になった。西側縁から約20cm離して、長さ50cm、幅30cmほどの石を、「ひざ石」として置いている。

墓標は扁平で、厚さ10cm内外、幅44cm、高さ85cmの自然石である。加工した痕跡などは残っていない。ほぼ中央部に、半分ほどを小石の中に埋めて立てられているが、わずかに北側に傾いている。

墓標は、墓壇の中心よりやや北側にあり、1.1m×1.1mのほぼ円形で、深さは0.7mある。底はほぼ平らで、0.65m×0.7mの、これもほぼ円形に掘ってある。棺材、釘などは全く認められなかったが、掘り形からすれば、桶に入れて葬られたものと考えられる。

人骨も、全く残っていなかったが、墓壇の底に接するくらいの深さに、盃が1個出土した。

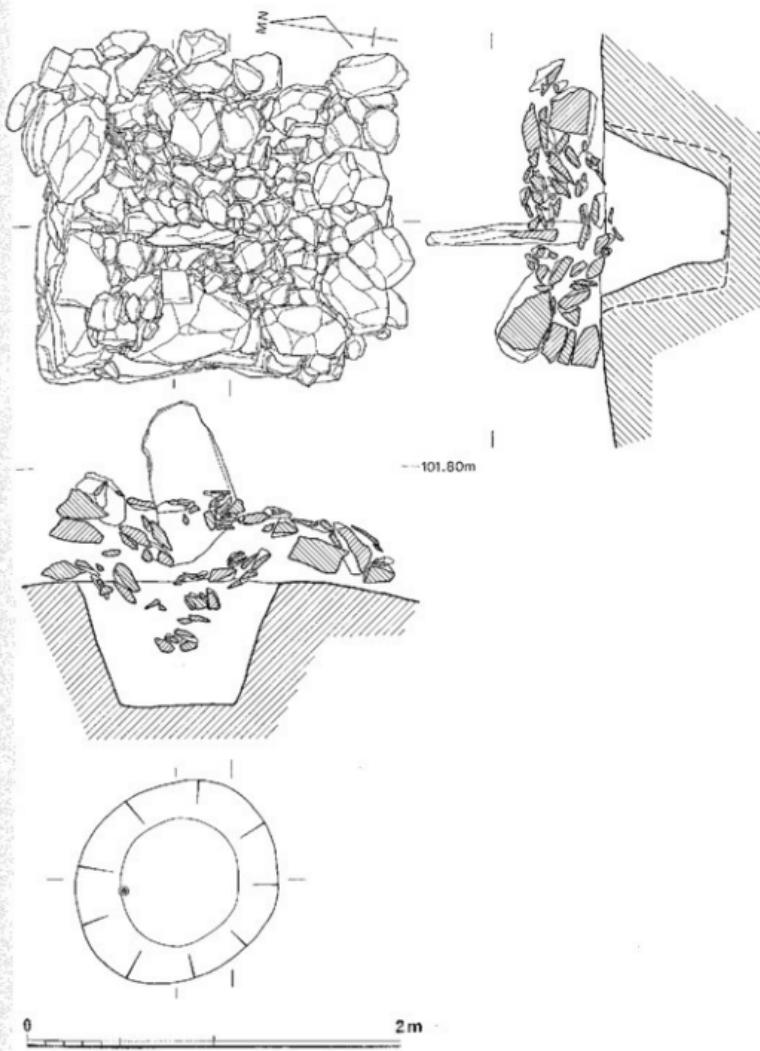
（耀田）

第4号墓（第10図・図版8）

墓域の中央部よりやや西方、第1号墓と第6号墓の中間に位置する。第5号墓に併設されており南面している。第5号墓に比べて軽然としており、基壇の南側（前面）の一部に損傷を受けているといえ、總体的にみて遺存度は良好の部類に属する。

基壇は、東西1.3m、南北1.5mを測る。四辺は40cm~50cm位の大きさの自然石を配列するが、北・南・西の三辺のみの作出で、東辺は第5号墓の西辺を兼用して基壇としている。その内側には他の墓と同じ様に扁平な角礫を20cm~30cm程度積みあげている。地下遺構空間の流れに伴い、墓標ともども沈下しており、隙間にかなりの広さの間隙を生じている。述述中の出土品として、近世陶磁器片、青磁片、中世陶磁器片等があり、近世陶磁器片の出土量がその一位を占める。また、腐蝕の著しい半壊した寛永通寶の出土もあった。基壇の前面中央部に、長さ約65cm、幅約35cm、厚さ約10cmの扁平な石が配設してあるが、これが「ひざ石」であろう。

墓標は、長さ96cm、最大幅64cm、中央部の厚さ16cmの扁平な丸味を帯びた板状石で、基壇の中央部に直立して建てられ南面する。多少、墓標への陥没も考えられるが、建立当時とさしたる変化はないであろう。柄部は約20cmほど埋められ、周囲を力強く押さえ、しっかりと固定さ



第9図 第3号墓実測図

れている。

下部構造は十演で、平面プランは円形で、その形状は円筒形を呈している。その法量は、上端部で東西0.85m、南北0.9m、下端部東西0.6m、南北0.6mを計測し、比較的小形である。埋納具は木製桶と考えられるが、その遺存体は見られなかつたし、その痕跡もまた不明であつた。墓壇全体に新性的の弱い柔かい土が充満しており、人骨の検出は見られなかつた。

副葬品は貧弱で寛永通寶1枚と近世磁器片1点だけの出土であつた。

第5号墓（第10図・図版8）

墓域の中央部よりやや西寄りに第4号墓と隣接して構築されている。墓標は南方を向いている。墓壇部の陥没により墓標が前傾しているものの破壊を受けておらず、遺存度は極めて良好である。

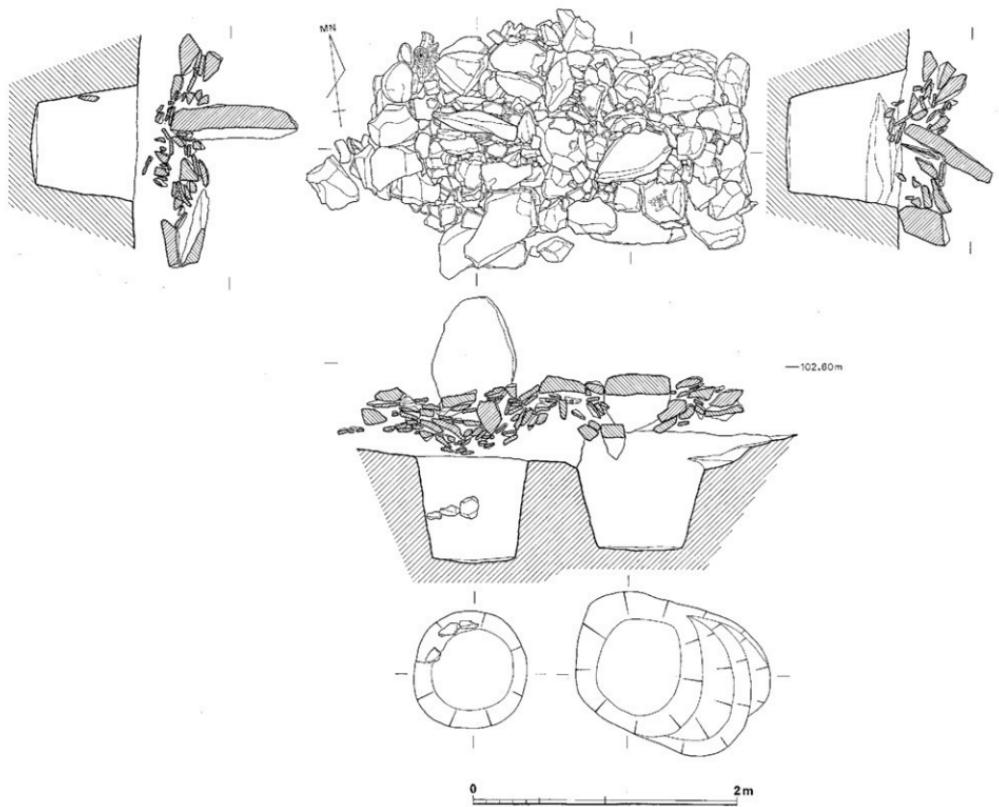
墓壇部は東西1.6m、南北1.4mを測り、比較的小形の部類に属す。四辺に比較的大きめの自然石を巡らしているその構築法は、他の墓の墓壇部と同様であるが、四隅の石はその中でも割合に大きく、しかも立てて使用され、その間に人頭大の石を積みあげたり、扁平な石は2～3段積みあげるという第4号墓と少々違った工法を見せる。内側には扁平な小角礫を積みあげる共通の手法である。墓壇西側辺は第4号墓と共存して2基一組の形体をとり、相互の関連性を顯示する何等明確な資料に遭遇していない。「ひざ石」の設置はない。

墓標は長さ75cm、最大幅50cm、厚さ13cmの丸味を帯びた板状石で、墓道のはば中央に両面して建てられている。墓標尻は墓壇の上に小藻を丸くセットして挿え、柄部の周囲を角礫で押さえて固定してあったようであるが、墓標空間への陥没のために半分程埋没して、約30度前傾している。使用石材の劣化による剥落が見られる。梵字、銘等の刻入は一切ない。

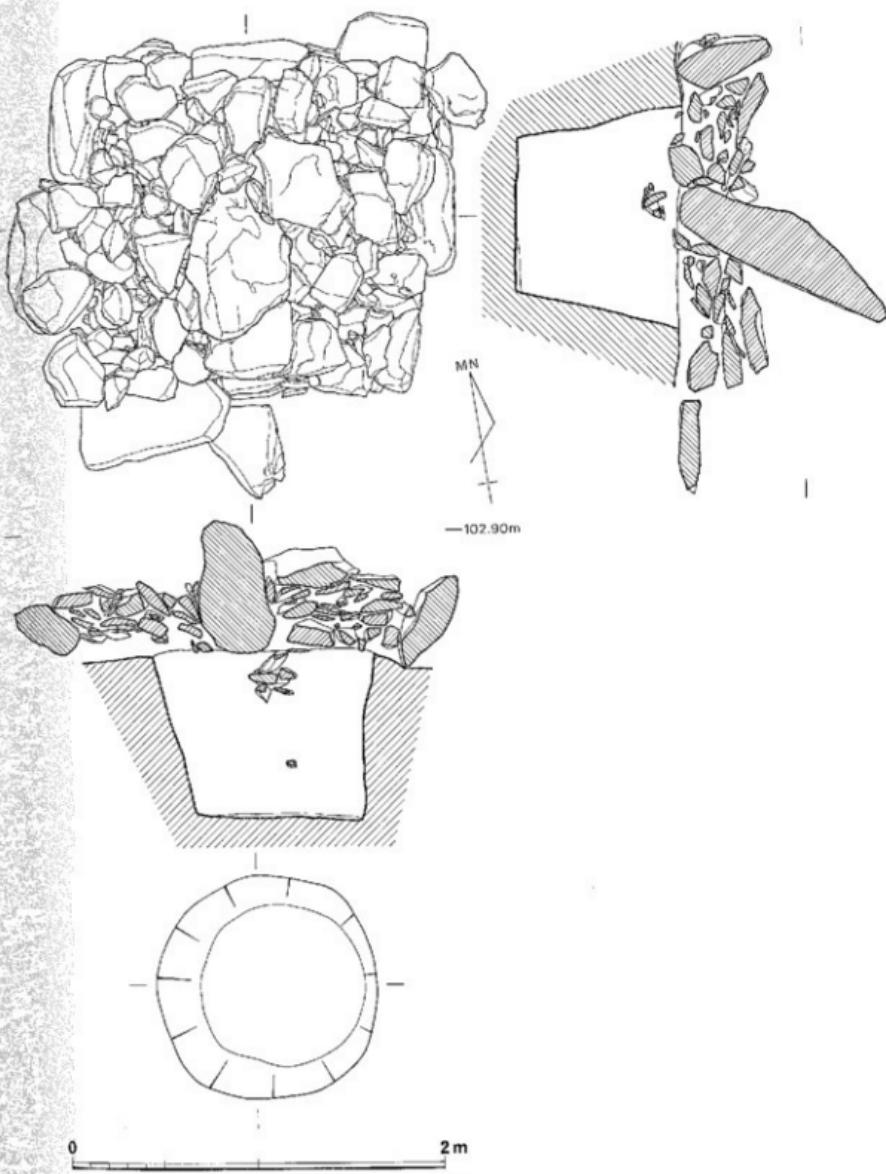
下部構造は墓壇である。墓壇部を除去し約15cm位掘り込んだところ、墓壇の北側の一帯に厚さ10cm位の炭化物および灰の層が見られた。埋葬時に墓壇上で直接何かを燃やしたか、別の場所からの移動によるものかは不明である。墓壇は墓標の直下、墓の中央部に掘られている。掘り方の東側にかなりの乱れをみる。墓壇の修正痕であろうか。最終的な埋納構は、上端部東西0.95m、南北1.05m、底部東西0.63m、南北0.72m、深さ0.85mの大きさを測る。形状は円筒形である。

副葬品として墓壇底部に接して寛永通寶4枚の出土があった。そのうちの3枚は重なりあつた状態での出土である。墓壇外からも青磁片、近世陶磁器片等が出土している。

（田川）



第10图 第4号墓·第5号墓剖面图



第11圖 第6號墓史剖面

第6号墓（第11図・図版9）

墓域の中央部にあり、正面は南側を向いている。

基壇は、長さ60cm～80cmの石を横にして方形に並んで、中に挿入から60cmほどの石をつめこんでいるが石と石の間に隙間が多い。四辺の石は、横に立ててあるため倒れかかっているものが多いが、もともとは180cm程の方形状の基壇と想われる。南側正面の東半分は横に石を立てず、三段に積み重ね、面をそろえている。基壇は地上から40cm～50cmの高さを持つ。南西隅の石が一部覆っているが、正面中央に50cm×40cmほどの板石が一枚置かれており、「ひざ石」と考えられる。

墓標は長三角形の棒状の自然石を利用し、長さ125cm、幅55cm、厚さ35cmを測り墓域内では一番大きい自然石墓標である。 $\frac{1}{2}$ 程が石積み内に納まるが、根じめをしっかりととしていないために南側に大きく傾いている。

墓塚は、円形プランで断面は逆台形状をなす。上面は1.2m×1.2m、底面は0.9m×0.85m、深さ0.9mを測る。墓塚は地山を穿ってつくられ、中には柔かい茶褐色土が充満していた。形状から桶棺であったと判断される。積石墓に利用された石は全て玄武岩である。

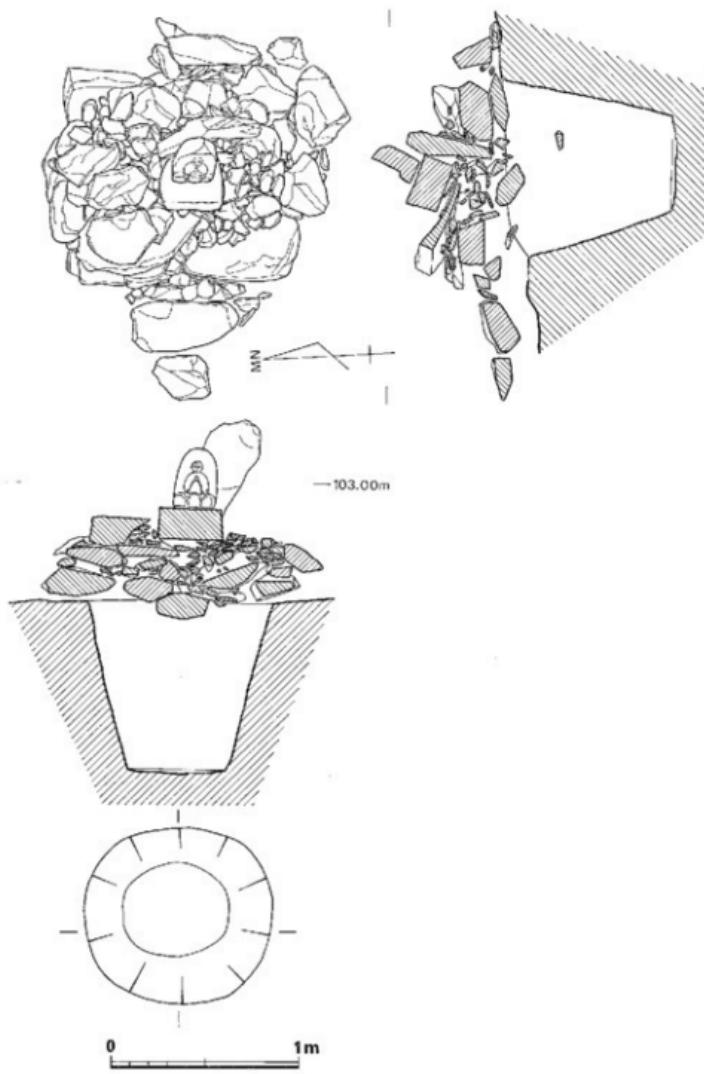
墓塚内から人骨は検出されず、また遺物の出土もなかった。

第7号墓（第12、13図・図版10、21）

墓域の北東部、石組造築の南側ちかくに位置し、第10号墓の基壇北東隅を一部破壊している。正面は西側を向く。

基壇は、南西隅がやや壊れている他はほぼ原形をとどめている。南北1.5m、東西1.2mの長方形形状の基壇で、四辺は40cm～60cmほどの石を三段に重ね面をそろえている。中に10cm～20cmほどの小石を多量につめこんでいるが隙間が目立つ。基壇は地上から30cm～50cmの比高をもつ。西側に板状の石が南北軸に平行して2枚並べられており、「ひざ石」と考えられる。長さ57cm、幅26cm、厚さ13cmの大きい方が基壇の手前におかれ、長さ28cm、幅24cm、厚さ9cmの小さな石がそのまえにおかれている。

墓標は、扁平で細長い自然石の板石をたて、それに仏像形石塔をもたれかけるようにして積石上に据えている。自然石墓標は殆どが積石内にあるが、根じめをしっかりととしていないため、南側に大きく傾いている。長さ93cm、幅29cm、厚さ12cmを測る。仏像形石塔は基壇の中心より南側にややずれた位置にあり、うしろ（東側）に合座共に併せ自然石墓標にささえられた格好になっている。塔身は舟形光背に半像独尊形式の仏像を肉彫りし、蓮花座上に趺坐し仏掌印をなしている。うらは粗いつくりのままで、柄は断面円形で先は丸く尖る。身の長さ35.4cm、最大幅23.4cm、光背部で9.9cmの厚さ、蓮花座で15.6cmの厚さがある。仏像頂部まで26.8cmを測る。柄は長さ4.8cm、根元径は6.4cmを測る。合座は、上下は平坦で上面に円い凹穴をあけ



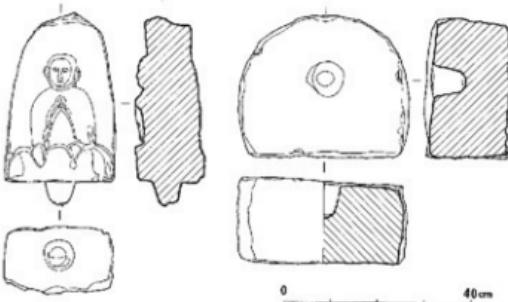
第12圖 第7號墓室圖

る。平面形は円形を前面だけまっすぐ切りとったようなカマボコ形をなす。長さ30cm、最大軸36cm、前面長23cm、厚さ18cmを測る。塔身・台座共に玄武岩を用い、作りはあまり丁寧でない。組み合わせておいた場合、向って右側に傾く。

墓標は、平面形が南北にやや長い円形をなし、断面は逆台形を呈する。基盤の中心よりやや東側にずれている。平面の長軸は1.0m、短軸は0.95m、底面は長軸0.55m、短軸0.5m、深さ0.9mを測る。墓標は頸山を穿つてつくられ、中は柔かい茶褐色土が充満していた。形状から桶棺であったと思われる。

床から7cmほど上に骨片、歯などが若干みられたが、残りは悪い。墓標の南西側で上面から24cmほど下から古銭（照寧元寶）が一枚出土している。

(宮崎)



第8号墓

第13区 仏像形石塔実測図

後日、毫でないことが判明したため、欠番とした。

第9号墓（第14図・図版11）

墓域の北東部にあり、第7・10・11・15号墓と石組造橋の間に位置する。正面が西側を向く、わりと小形の方形墳石墓である。

墓壇は、正面部分に長さ80cmほどの石を横に立てる使は、長さ40cm～50cmの石を2段から3段に重ね、中に拳大から40cmほどの石を積み込んでいる。墓壇が小さいわりに石が大きめなので、隙間が多く見られ、不統一で粗雑な作りである。地上から墓壇は40cm～50cmの比高をもつ。西側に長さ30cmほどの方形状の自然石が置かれ、正面真中に位置するところから「ひざ石」と考えられる。

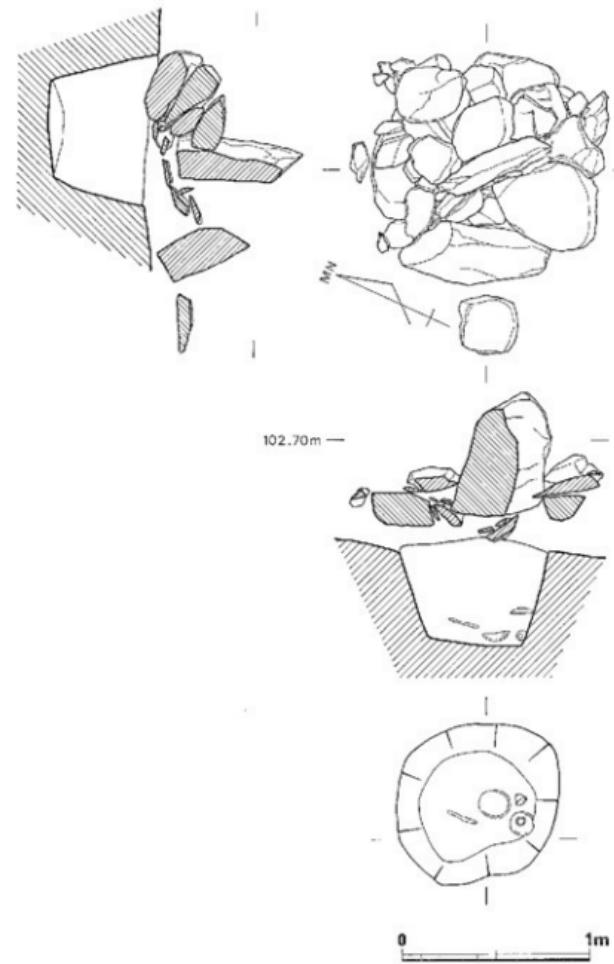
墓標は、扁平で先が尖った三角形状の自然石を用い、正面は墓壇の南角を向いている。½ほどが横石内に入り、うしろ（北側）はわりと念入りに石をつめ倒壊を防いでいる。長さ65cm、幅65cm、厚さ15cmを測る。

墓標は、墓壇の中心より東側にずれた位置にある。上面が0.85m×0.9mのいびつな円形、底面は0.6m×0.65mのいびつな楕円形をなし、断面は深さ60cmほどの逆台形形状を呈する。中は柔かい茶褐色土で埋まり、形状から桶棺であったと思われる。墓壇・墓標に用いられた石は全て

玄武岩である。

底面から5cm～10cmほど上に頭蓋骨と足の骨かと思われるものが検出されたが、残りは悪い。底面から20cmほど上に近世陶磁器の直1枚が裏返しに、5cmほど上に盃が1個横に倒れた状態で出土した。

(宮 範)



第14図 第9号墓実測図

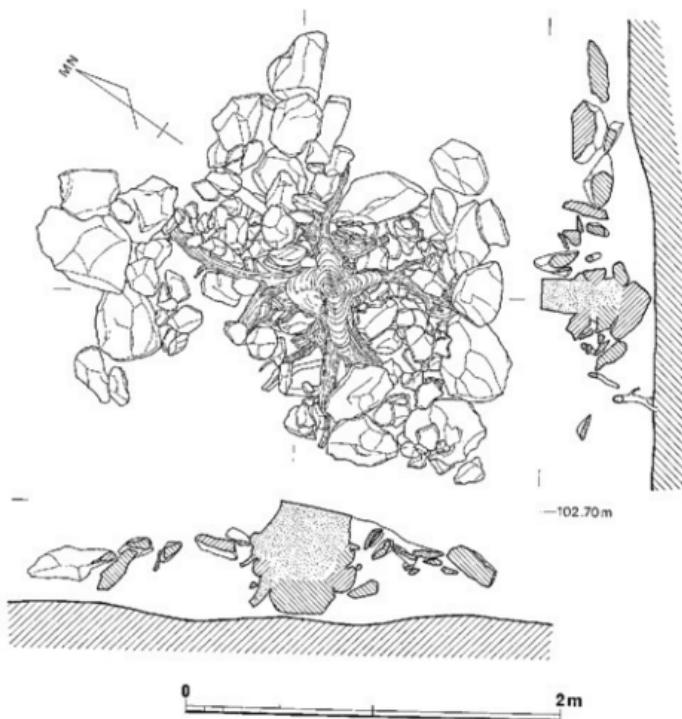
第10号墓 (第15図・図版12)

東北部に位置し、第7号墓の南西端部と接している。全体的に乱れているが、南東側がわずかに残りは良い。中央部に大木があって、この部分の亂れも大きい。周辺の、他のものと同じく、西を向いているものと思われる。

現状は不整形で雖然としているが、南東側縁部の石のあり方から推測すると、もともとの基壇部分は約1.5m四方の正方形をしていたものと思われる。回りに入きめの石を置き、中央部に小さな石を詰めている。「ひざ石」らしいものはない。

墓標は、木によって動かされ、倒されたものか、現在は立っていない。

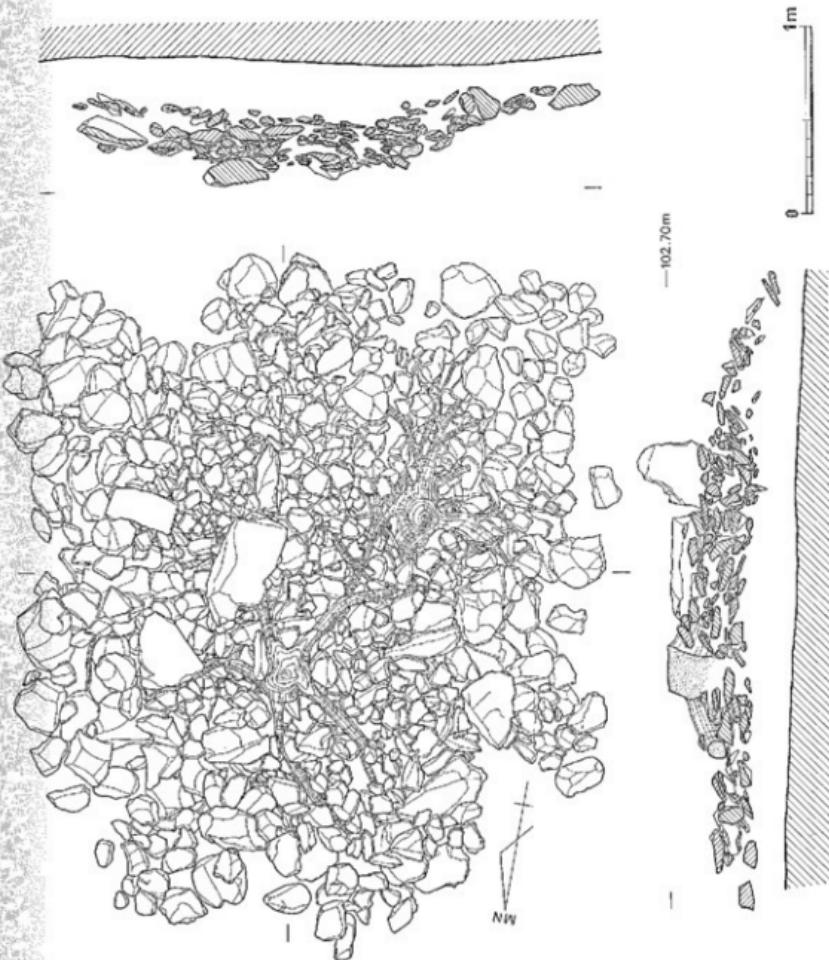
墓塚は掘られていない。地山の、南北方向への傾斜はほとんどなく、北東から南北方向に15cmほど低くなっているのみであるが、特にこの部分を整形したものとは受けとりがたい。



第15図 第10号墓実測図

第11号墓 (第16回・図版13)

東の端に近く、第9・第10号墓の南側に位置している。大小の石を集めめた積石塚のようで、当初はそれほどとは思わなかつたが、清掃して石を出してみると、今回調査したものの中でも最大規模のものとなつた。これも西に向くものと思われる。



現状は、東西3.2m、南北3.5mほどの、不整形ではあるが長方形に近い形をしており、中央部で0.7mほどの高さがある。もともとは、東西2.5m、南北3mくらいの大きさであったと思われる。周囲の石は大きく、ひと塊えほどの石もあるが、特別に石垣のように積んだ部分は認められなかった。

墓標として、厚さ10cm強、幅34cm、高さ56cmの自然石を、中央よりやや南側に立てている。半分ほどを埋め、頭部をわずかに南に傾けている。この石のすぐ北側に、幅33cm、長さ64cm、厚さ約15cmの自然石が横たわっているが、大きさ・形から、墓標として使われていた可能性も考えられる。

積石の下に、基壇などの埋葬のための施設は認められなかった。地山はほぼ平らで、東西方向にはほとんど傾斜ではなく、南側に緩く傾いている。この傾きは当初からのもので、整形したもののようには思えなかった。

石積みや、盛土のなかから、青磁片や須恵器片が出土し、地表付近では燒前焼の破片がみつかった。

しかし、人骨や、副葬品と思われるものは一切検出できなかった。

第12号墓 (第17図・図版14)

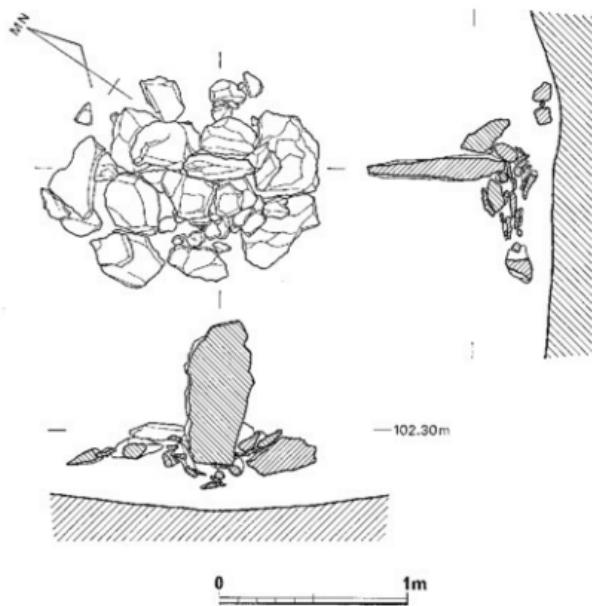
中央部よりやや東側にあり、第10号墓の南、第11号墓の西側になる。西側を向くものと思われる。小さくて簡単な作りである。

縦1.0m、横1.2mほどの長方形に、大きめの石を一段だけ置き、その内側に小さな石を詰めているが、石の数はさほどではない。

墓標には、幅38cm、高さ77cm、厚さ15cm弱の扁平な自然石を使用している。下部の、ほんの一部を石の間に挿し込んだという感じで立たせており、それでも不安定なために、前後から大きめの石でおさえている。何度も倒れたようで、最近にも立て直されたという感じがしないでもない。

地上部分は、いかにも墓のような形態をしているが、地下の基壇は認められない。ほんのわずかな地山面のくぼみはあるが、埋葬施設は持っていないかった。

人骨・副葬品とともに認められなかった。



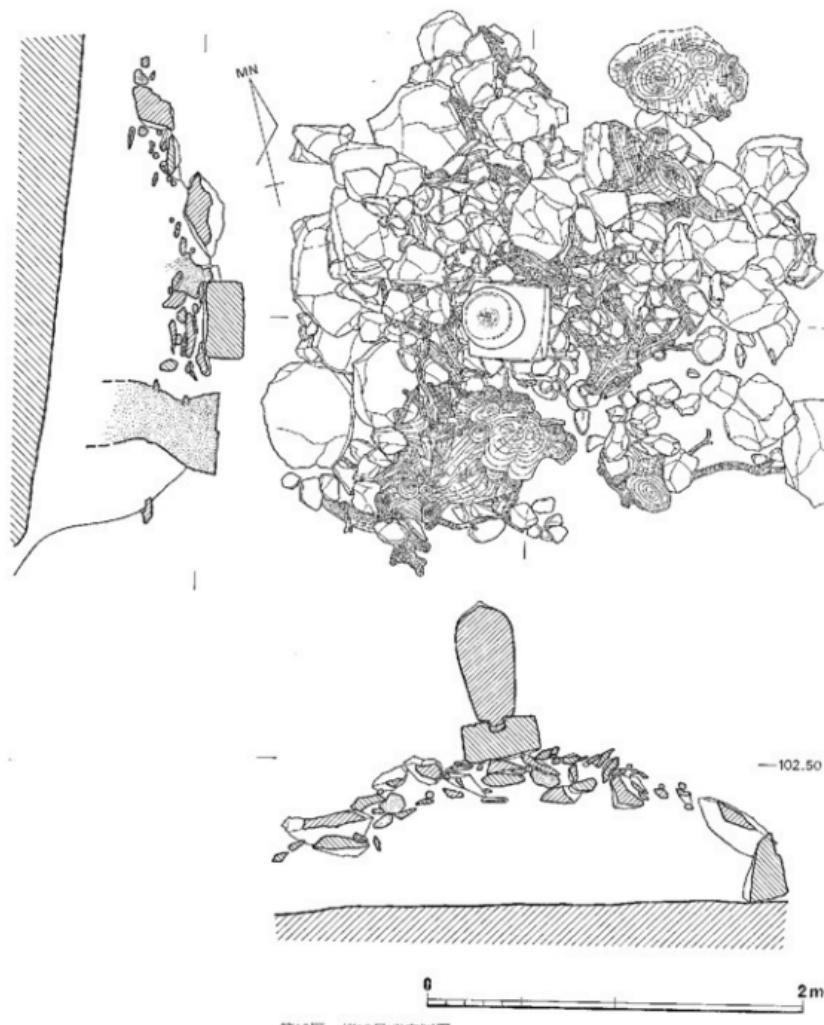
第17図 第12号墓実測図

第13号墓（第18図・両版15）

第13号墓は、第11号墓の南、第16号墓の東に位置し、墓域の最南端にある。西に面した「竹翁」銘の無縫塔を持つ。南側は崖とともに崩れており、石積みのなかも木が繁茂していて、全体的にかなり乱れている。

現状は、東西約2.6m、南北約2.6mであるが、もともとは2.5m四方の、正方形に近い形をしていたものと思われる。高さは、地山面から約0.8mほどある。四辺に、ひと抱え以上もある石を配し、中央部にやや小形の石を集めたものと思われるが、南側縁部は崩れており不明である。この石積みのはば中央部、表面から0.3mほどの黒褐色土中に、近世の磁器が出土した。

墓標(第22図) 墓標の尖った無縫塔を使用している。高さ64cm、最大直径32cmあり、底は平らで、台石に差し込むための直径7.5cm、長さ4cmの納が付いている。この前面に、「竹翁」の二字が行書で記されており、その下方に、横一文字に長さ5.5cmの断面U字形の彫り込みがある。この彫り込みは、台石上面にも4cmの長さに彫られており、いずれも「前」を示す印と考えられる。



第18图 第13号墓壳剖面

台石は、前面での幅41cm、後は39.5cm、長さ41.5cmで、厚いところで21cmある。上面はわずかに丸味を持つよう整形され、中央部に直径11cm、底部で直径5.5cm、深さ8cmの円形の受穴が穿ってあり、その前方に「前」の印を付けている。四隅に蓮弁の中央がくるようにして、正面に4枚、側面に3枚の花弁を彫っている。下面の調整は大ざっぱである。塔身、台石ともに玄武岩である。

中央部に台石を据え、その受穴に無難塔を差し込んで立てているが、下に積まれた石が安定を欠いているため、台石・塔身ともにやや西側に傾いている。

地表では、以上に述べたように、十分墓としての形態を整えているが、地下には、全く埋葬の施設は認められなかった。現表面から30cmほど下までは扁平な石で、その下部は茶褐色の土と木根があるのみで、先述した磁器のほかには特記するようなものはない。地山の表面は平らになっており、南側に緩く、西側にもわずかに傾いている。

人骨や、それを納めたようなものも認められなかった。

(藤田)

第14号墓 (第19回・図版16)

墓域の南東部にあり、第12・16号墓と接する。埴塙北東隅が木の根によって搅乱をうけているが、原形は長方形状をなすものと思われる。正面は西側を向く。

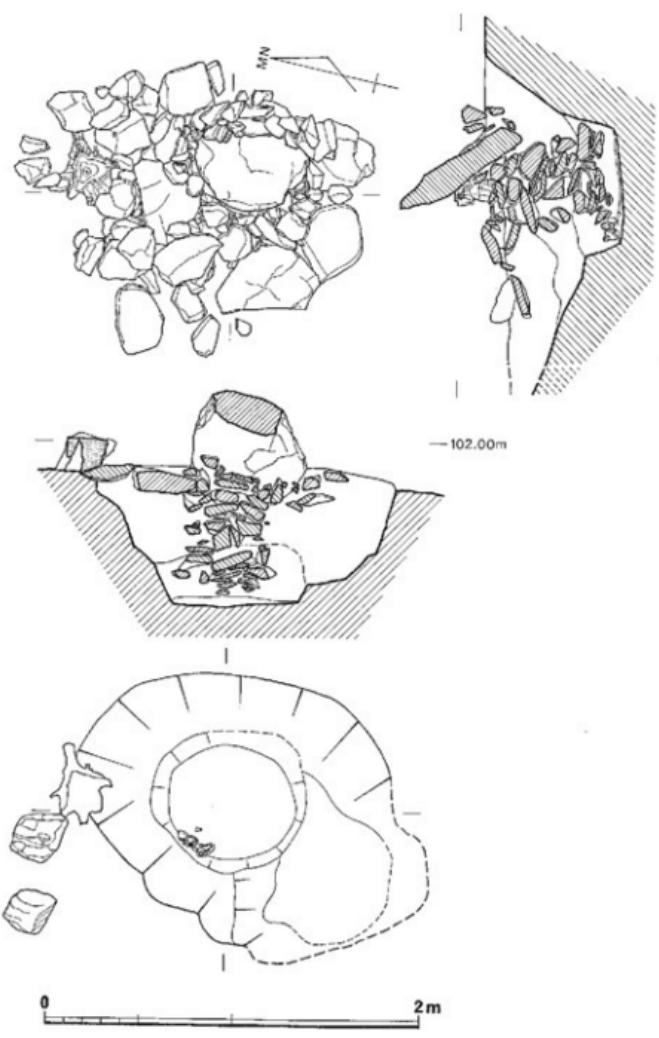
基底は、四辺に30cm~50cmほどの石を長方形状に配し、中に小石を敷いたような状況であり、積石というよりも敷石墓といった状態である。断面では多量の石が埴塙の底面近くまでむらなく落ち込んでおり、その状況を見れば埴塙の上にいったん積み上げていた石が落ち込み、その後に敷石状の墓を作り直したことが想定される。

墓標は、長さ80cm、幅60cm、厚さ15cmの三角形状の扁平な自然石を利用し、西側正面に傾いている。殆どが石積みの中にあらが、うしろの根じめが弱いために倒れかかった状態になっていると思われる。

埴塙は、南側が風倒木による搅乱によってプランがはっきりしないが、上辺は1.8m×1.4mの楕円形状をなすものと思われ、中位に段がつき径80cmの円形を呈する。底面は0.6m×0.7mのほぼ円形をなす。巾は柔かい茶褐色土で埋まり、形状から桶棺と思われる。墓に用いられた石材はすべて玄武岩である。

出土遺物は、埴塙の北側上部、上面から約15cmほどに寛永通寶1枚が出土し、底面東側に盃2個、皿1枚の近世陶磁器がまとまって出土した。そのうち盃1個は完器で、他2個は割れた状態で出土したがほぼ完全に接合・復原できた。

(宮崎)



第19图 第14号墓实物图

第15号墓 (第20図・図版17)

墓域の最東端に位置する。形状的に方形積石墓と異なり、略方形状に石敷した造構である。北側は陥没孔に向って部分的にずり落ちておらず、南側の右も傾斜にそってややずれている。

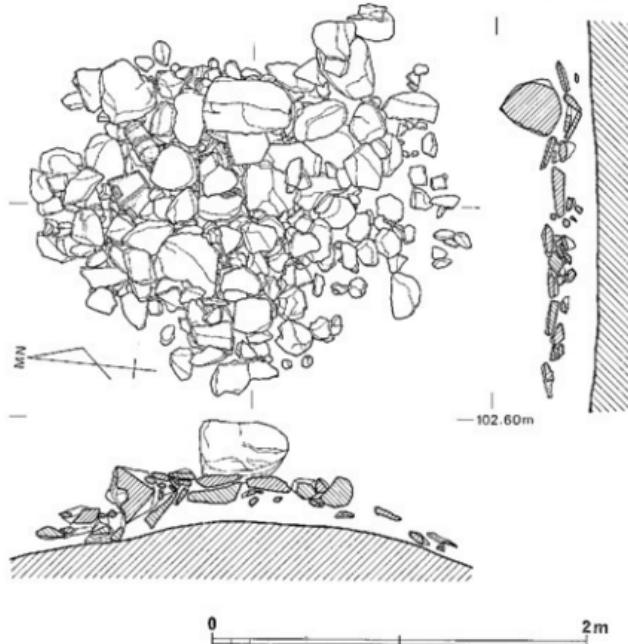
造構は、南北約2m、東西1.7mほどの範囲に薄く石積みした略方形状の集石造構である。石の大きさは、5cm以下の小さなものから、40cm大のものまでまちまちで、区画性に乏しく整っていない。東西方向は平坦に石積みされるが、南北はやや盛り上り40cmほどの比高をもつ。上面の標高は102.3mを測る。10cm~15cmほどの厚さに集石が見られ、その下には茶褐色土が10cm~15cmほどあり、地山に達する。南北断面から判断するならば、茶褐色土を盛り上げそのうえに薄く石積みを行なったことが考えられよう。造構のなかには、宝鏡印塔の軸輪と笠、五輪塔の水輪の部分が混じっている。

墓標は、集石の東端に長さ48cm、幅30cm、厚さ25cmの自然石が横に据えてあり、これが倒れたものでなければ、正面は西に向くことが考えられる。

墓塚は、地表面まで掘り下げ精査したが検出できなかった。

石積みのなかから、須恵器、土師質土器、近世陶磁器、李朝陶磁器などが破片で出土した。

(官 埼)



第20図 第15号墓実測図

第16号墓 (第21図・図版18)

第13号墓と同じく墓域の南端にあり、第13号墓の西側に接している。さほど高さもなく、当初は全く注意していなかったが、清掃作業が進むにつれ積石塚的様相を呈してきた。

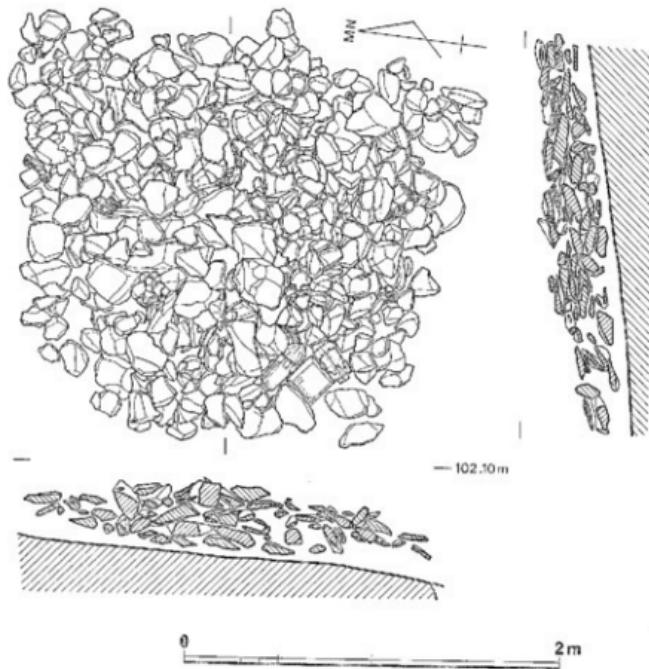
積石の範囲は東西約2m、南北は、南側が少し崩れ落ちているが残り部分は約2.1mで、長方形に近い。四辺はほぼ東西南北の向きに描っている。石には、人頭大からそれ以下の大さの扁平なもので、無造作に寄せたという感じである。また、宝鏡印塔の部分も混じっており、雖然としている。側縁部も、意識的に積み上げた所ではなく、特に大きな石を置いたように見えない。

墓標は立てられていないし、また、それに使用したと思われるような石も残っていない。

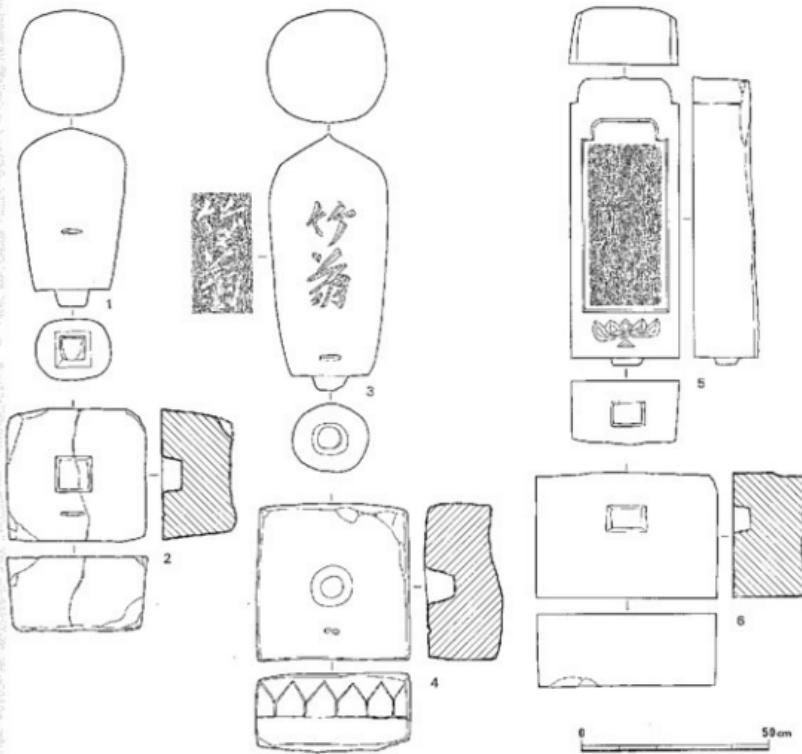
下部の邊境も全く認められなかった。石の間は割に空間が多く、その下部には茶褐色の土があった。地山は平らで、西側・南側に緩く傾斜している。

人骨・副葬品とともに認められなかった。

(藤田)



第21図 第16号墓実測図



第22図 石塔実測図

無縫塔・供養塔（第22図・図版21）

1・2は、第2号墓に用いられていた無縫塔である。何の装飾もない單純な形をしている。

3・4は、第13号墓のもので、「竹翁」の銘が刻まれている。台座の四辺には、蓮弁と思われる浮彫りが施されている。

5・6は、第5号墓のすぐ東側に接して建てられていた。6の台座を直接地面上に据え、その納穴に5の柄を入れている。5・6ともに玄武岩製で、正面はきれいに整形しているが、裏と下部には粗雑な面を残している。5は、高さ75cm、幅29cm、厚さは17cmあり、中央部に「忠山義心」「芳園妙香」と、二行ならべて彫り、中央下部に「塔」と彫られている。おそらく、夫婦に対しての供養塔と思われるが、第4号墓と第5号墓に対してのものでもあろうか。

（藤田）

石組遺構（第23図・図版22）

墓域の北東部にあり、東西に細長く広がる石敷の遺構である。板状の自然石を北側に立て並べ正面は全て南西方向を向いている。ここでは一応石組遺構と称したが名称に若干問題がある。

遺構は、尾根状に東西にのびる自然地形の南側斜面を整形している。地山の比高30cmほどに敷石状の石積みをおこない、山腰にそって自然石拝塔を北側に立て並べたもので、東西の長さ9.5m、南北の幅1m～3m弱を測る。

西端は小ぶりの石が集積し裾も仄い。中央より西半部は、長さ2.7mほどにわたって、30cm～40cmほどの石を横に並べ、一部では二段に積み、南側の石の面をそろえた状況がうかがえる。中央より東部には大ぶりの石が多く混じり、崩れて裾が広がっている。平面的にも石と石との隙間が目立つ。

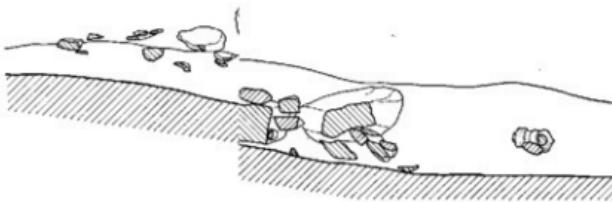
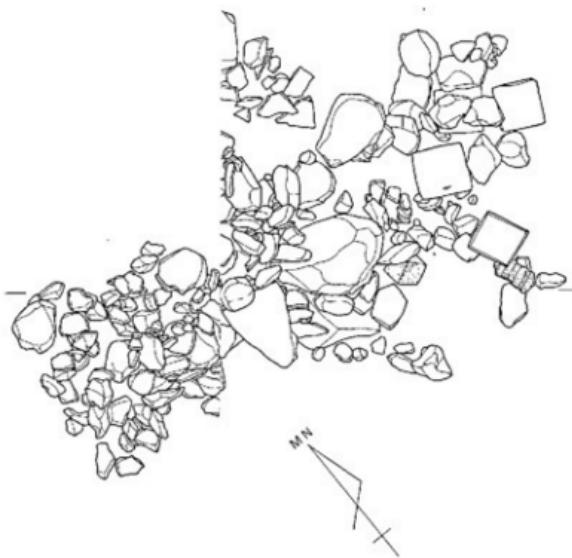
拝塔は、長さ40cm～80cmほどの玄武岩の長三角形状の板状石を利用して、集石のいちばん高い北端部分に16個立て並べている。単独に立て根元を石で押えるものと、数個の石を立てかけ組み合わせた形状のものがある。後者は、下部がしっかりとしておらず、空いた状態が視察されるため、後世に並べ直したこととも充分考えられよう。正面部の平坦面に經沈縫が上下に何条にも等間隔に引かれているものが4箇体に認められ、風化をうけていなければ他のものにも線刻されていたことが推測される。これが何の目的で描かれていたのか明瞭でないが、経文などが線内に書かれていたことが想定される。

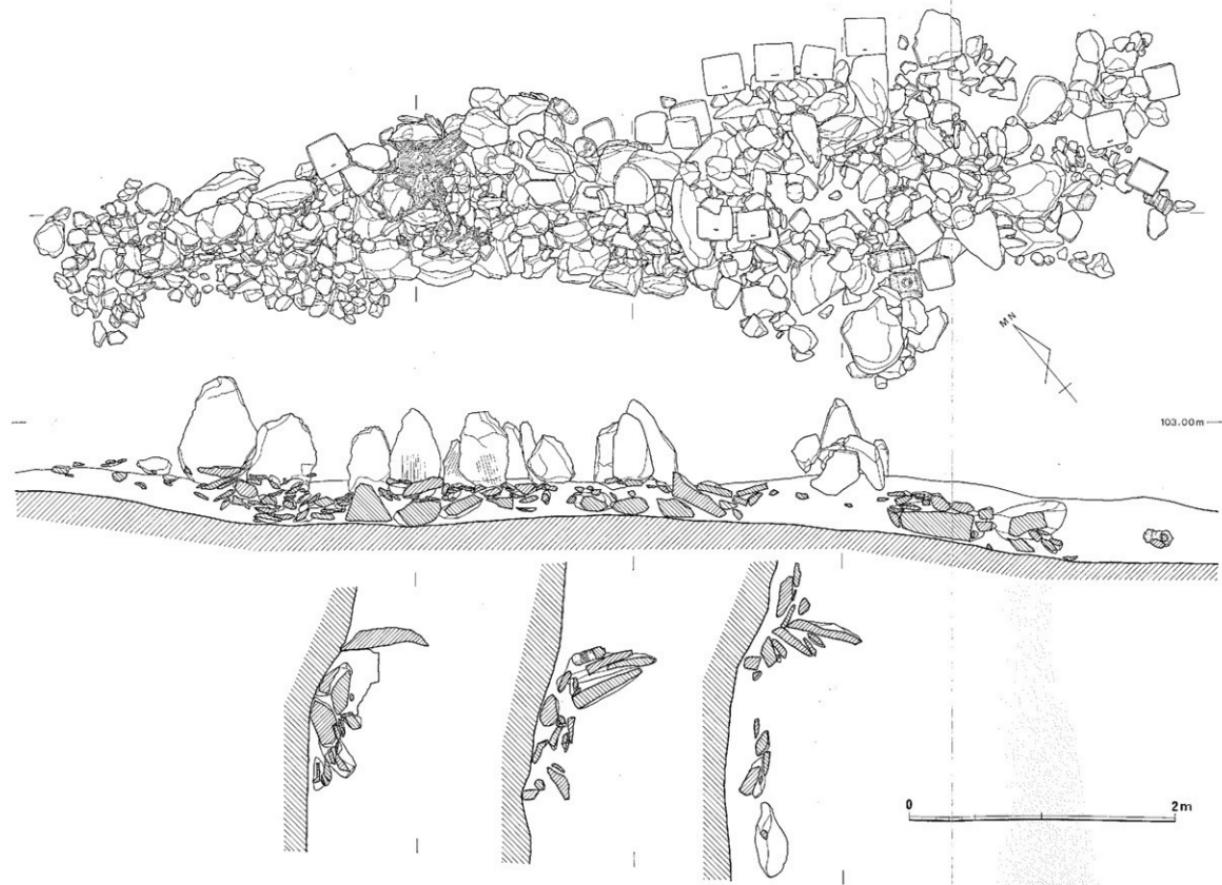
この遺構では、集石中に宝鏡印塔や五輪塔の部品が散在しているのが目立つ。しかし、基礎の部分で8個ほど原位置のままと考えられるものがあり注目される。正面を示す「一」形の切り込みをもつ基礎部分が、西側に1個、中央より東北部に4個、東南に2個、東端に1個あり、中央より東北と東南にあるものは飛石状に並んでいる。「-」形切り込みは全て南側にあり、上部があれば皆正面は南側を向いていたことになる。

集石内の出土遺物は、須恵器、土師質土器、青磁、近世陶磁器片、不明鉄製品（新らしいか）鉄錐、古錢として永樂通寶2枚、元祐通寶1枚、寛永通寶1枚、不明4枚の合計8枚ある。永樂通寶、元祐通寶は石の下から出土しており、当遺構の築造年代を考える上に重要な遺物と思われる。

当遺構の性格は明確でないが、墓域における神聖な拝所であった可能性が強いと考えられよう。

（宮 間）





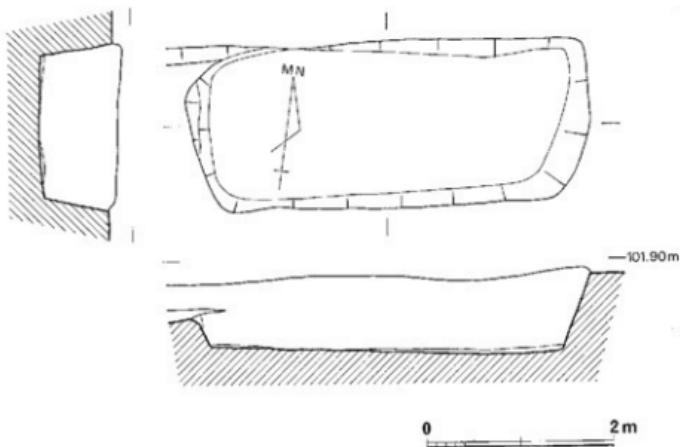
第23図 石組遺構断面図

大土壙 (第24図・図版23)

基壇西部にあり、2号墓に一部切られた格好でその東側に延びる。黄褐色の地山を掘って設けられた長さ4.25m、幅1.8m、深さ0.8mの隅丸長方形状の大土壙である。東側短辺がややいびつな形はわりとしっかりした隅丸長方形をなし、底面はほとんど平坦で傾斜はない。土軸は東西方向にあり、N=80°—Eを向く。覆土は炭化物が少々混じる茶褐色の草一上層である。

中からは、須恵器、土師質土器、青磁、近世陶磁器破片が出土している。2号墓に切られていることから、それより時期的に古くなることは確実だが、山上遺物から性格について言及することはできない。想像をたくましくすれば、天德庵建立の際挖土粘土を取った跡ではないかとも考えるが明確でない。

(宮崎)



第24図 大土壙実測図

(3) 遺物

遺物は、墓に副葬された陶磁器・銅鏡・数珠などのほか、須恵器・備前焼・青磁・染付など多岐にわたって出土した。そのため、ここでは「墓地出土の陶磁器」・「銅鏡」・「数珠」・「その他の土器・陶磁器」と、周辺に散乱していた「石塔」とに分けて記述することとした。

墓地出土の陶磁器

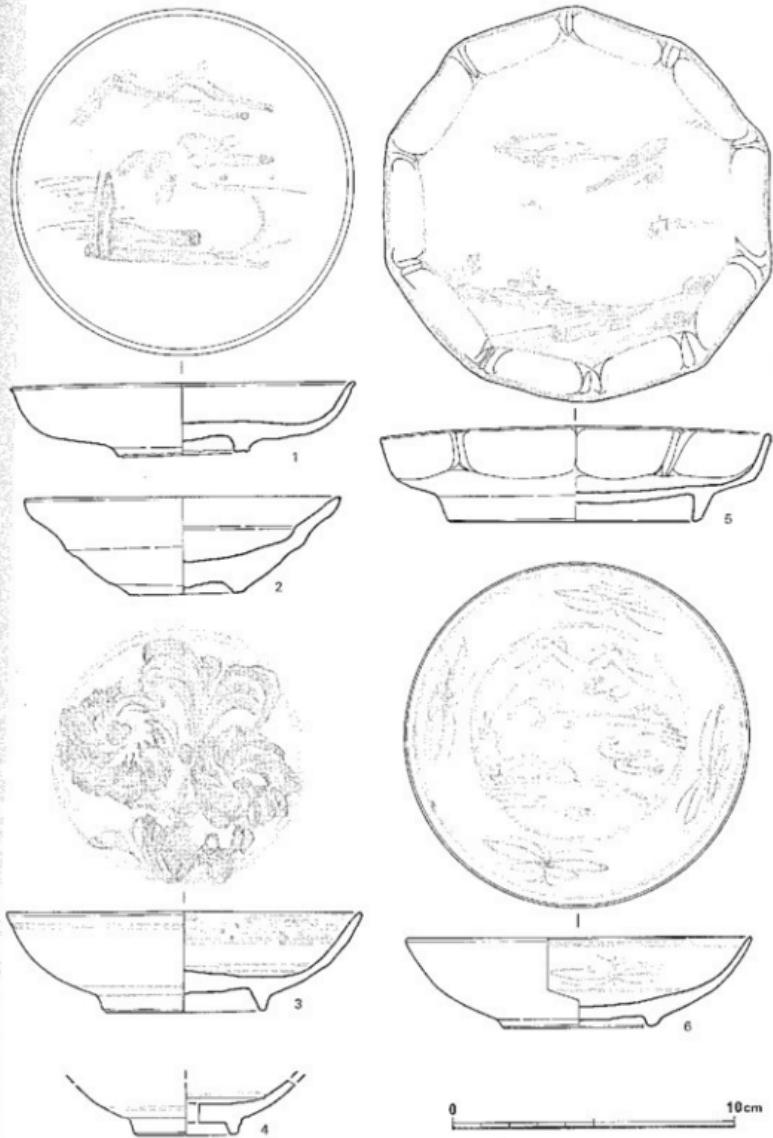
皿・向付（第25図1～6　巻頭図版・図版26・27・28）

1 第9号墓から出土した。口縁の一筆を欠くのみで、ほぼ完形の皿である。器高2.6cm、直径12.4cm。底部は厚く、陶器的な削り方をしており、高台には、焼成時に付着した砂を残している。成形・削りとも、左廻りにロクロを使用したものと思われる。見込に山水文が描かれているが、飲分を含んだ組具須を用いたものとみえ、青味が少なく濃灰色を呈している。遠景に山を置き、近くに水辺と思われる景色を描き、その間に鳥を配している。描き方はかなり大ざっぱである。全体的に灰色を基調し、内側に大きめの、外側にはこまかに貫入がある。胎は良質で白色をしており、よくとけている。平戸系のもので、17世紀中頃までのものと思われる。

2 第10号墓から細片となって出土したが、ほぼ復原できた。わずかに茶色味をおびた灰色をしている。体部に段を付け、外上方に伸ばした先端をやや尖り気味におさめている。厚手の作りで、高台外側はほんのわずか削り、内側も荒く一息で仕上げている。釉は内側と、外側は口縁直下までで、体部から底部にかけては釉がかからず、水引き底を明瞭に残している。成形時は右に、削りには左廻りにロクロを使っている。見込に、重ね焼きのための目土の裏を圧力所滅している。直径11.3cm、器高3.5cm。胎は乾いた感じの荒い土で、堅く焼きしまっており、茶色をしている。三川内系のもので、おそらく慶長の頃のものと思われる。

3 4・5とともに第13号墓からの出土である。十数片に割れて出土したが、ほぼ完形に復原できた。直径12.8cm、高さ3.6cmを計る。内外面とも淡い青灰色であるが、貫入部分に茶色っぽい土の色が付着している。陶器のような作り方を残し、厚い高台内面には削りの痕跡がはっきりと付いている。削り時のロクロは左回転である。見込に大柄な花文が、葉と茎の左右に二個描かれているが、濃い青色で、どぎつい感じを受ける。外面には、口縁下部と体部下側に、計3本の線を描いているのみである。胎はよくとけおらず、茶色っぽい色で、ザックリとした感じが残る。17世紀前半までのものと思われる。

4 高台部分の破片のみが見つかった。見込部分の釉を剥ぎ取って焼いてある。外側の体部下方に一本の線を入れ、文様を描いているが全体の圖柄はよくわからない。内外面に貫入が残っている。高台周辺には、いわゆるちりめんじわ状の削り痕を残している。削りは、ロクロを左回転させて行っている。これも、陶器風の作り方を残している。胎は3に似て茶色っぽく、ザックリとして乾いた感じである。



第25図 畠地出土の陶磁器(出図1)

5 二十片ほどに割れて出土した。型成形による十角形をした向付である。全体的にクリーク色をしており、表面が乾いた感じに変化した部分も認められる。磁器の胎であるが、緻密・堅硬といった本米の磁器の焼成までには至っていない。長径14.5cmで、直徑9cmの高台が付き、高さは3.4cmである。見込には風景画が描かれており、遠山の上方に雲を、下方には水上に浮かぶ帆かけ舟を、そして手前に切妻と思われる屋根を持つ家を配している。細密な線で描いたあとを着色しており、普通の陶工の胎とは違う描き方を思わせる。17世紀前半ころまでのものであろう。3・4・5とともに、平戸の中野焼と思われる。

6 第14号墓から盗とともに出土した。二つに割れていたが、ほぼ完形である。ゆるく内湾しつつ上方に伸びた体部の先端を、丸くおさめて仕上げている。体部・底部ともに厚く、全体的に陶器のようにボッテリとした感じである。全曲、淡い青灰色を呈し、外側にはやや小さめ、内側には大きめの貫入がある。見込の口縁部と底部に、一本ずつの線を描き、この線の間に四方に、頭を描いている。また、見込中央には山水文を描いているが、画題は、1の第9号墓出土の図と同じものようである。すなわち、遠景に樹木のある山を二つ、その下に島のようなものを配している。さらに鳥を飛ばし、手前には水辺の風景と思われるものを描いている。1に比べると、絵がやや小さい部分まで描かれており、全体的に丁寧になっている。使用している鉄須は青味があり、良質のものであろう。胎はサラッとした感じで、ガラス質のように濡れた感じはない。少し灰色がかった色で、小さな黒い点が認められる。三川内系統のものと思われる。江戸時代中期、18世紀初め頃のものであろう。

五 (第26図1~5・図版26・28)

1 第3号墓の墓底底部北側から、底を上に向けて出土した。口縁の一部がわずかに欠けている。仕上げ時に、高台をやや傾けて削り出している。ゆるやかに伸びた先端を、外側にひらくように曲げている。胴体下部は厚目で、容器の削り方を思わせる。高台の一端をこまかく欠いた部分が認められるが、焼成時に付着した砂を欠き取ったものであろう。口縁すぐ下から、胴体下部まで、22本の縦方向の刻目が彫られている。釉は淡い灰色で、一部黄灰色に見えるところもある。器高3.8cm、口縁径6.0cmを計る。胎はよくとけ、濡れたように見え、堅く焼き締っている。三川内系統のもので、17世紀中頃までのものと思われる。

2 第9号墓から出土した完形品である。ほぼまっすぐに外上方に伸びた体部の先端を、外側につまむようにして折り、薄い口縁部としている。胴体下部から底部にかけては厚目の作りである。中心のすれた、やや厚手の陶器風の削り波が残っている。高台端部には糸切り痕と、焼成時の砂粒が付いている。器表の、前と後に、左右三枚ずつ計六枚の細い葉を持つ、いわゆる秋草文を描いている。成形、削りとも、左回転のロクロを使用したようである。器高3.5cm、口縁径6.4cm。全体にごく淡い青灰色を呈する。胎は良質で、とけて濡れたように見え、小さな黒点が混じっているのが観察される。17世紀前半の三川内焼と思われる。

3 第13号墓出土。数片に割れて出土し、口縁部付近をわずかに欠失している。いくぶん青味をおびた白磁の盃であるが、これも陶器風の作りを残している感じを受ける。口縁径6.8cm、器高4.4cm。外上方に伸びる体部先端をわずかに外に折り、やや尖らせ気味に作っている。底部は厚目に削り出しており、口縁部のすぐ下から胴体下部まで、縦方向に41本の文様を彫っている。高台脇から内側まで釉がまわり、砂を付着させている。削り時のロクロは左回転である。胎は、いくぶんとけ具合が足りないような感じである。17世紀中頃か、それよりやや古い時期の三川内焼と考えられる。

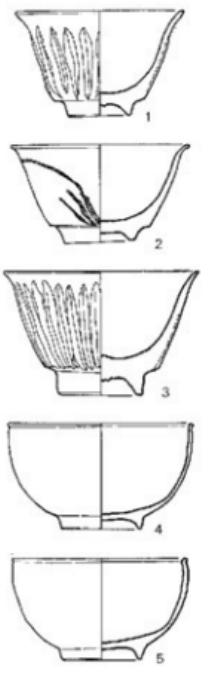
4・5とともに、第14号墓から出土した。数片に割れた状態で出土したが、ほぼ完形に復原できた。わずかに青味をおびた白磁で、1~3に比べると丸味の強い盃である。いわゆる羽歛手と呼ばれる部類のもので、非常に薄く、薄いための感じの作りである。丸く内弯しつつ伸びた唇が、ほぼ直上を向いたところを、ほんのわずかに外に折って口縁としている。胴体下部から底

部にかけても薄く仕上げている。胴体下部に、成形時にできたと思われる、横方向へのヒビが残っている。成形は、右回転のロクロを使用したものと思われる。高台端部に、わずかではあるが小さな砂粒の付着が認められる。見込部分は青灰色をしており、この部分は、釉に何かが混じってこのような色になったものと思われる。器高3.8cm、口縁径は6.6cmある。胎は、白色の良質なもので、よくとげており、ガラス質を呈している。

5 完形で出土した。4と同じように丸味の強い形で、作りも似ているが、体部の壁がわずかに厚い。4ほど青味のない白磁で、内・外面ともに小さな貫入が認められる。体部器表に、釉がとぶ寸前の、いわゆる柚子原が生じている。4と同じく、直径2.7cmの、断面三角形に近い形に先端の尖った高台を削り出している。ロクロの回転は右回りである。器高3.6cm、口縁径は6.3cmを計り、4よりやや小ぶりである。胎は、4ほどではないが、良質で、ガラスのように滑れた感じに観察される。

4・5とともに、完全な磁器の成形であり、削り方であって、ボッタリとした陶器のような作り方の痕跡は、もはや残していない。江戸時代中期、18世紀初め頃のもので、三川内焼であろう。これらは、第25図6の皿とともに出土したもので、時期的にも一致するものである。

(藤田)



第26図
墓地出土の高磁精実河窯(2)

銅 錢 (第27図・図版29)

造跡全体から計21枚分の銅錢が出土した。判読出来るものをみると、「寛永通寶」が9枚、「永樂通寶」が2枚、「熙寧元寶」が1枚、「元祐通寶」が1枚である。サビや割れや耗耗のため、拓影出来るものは1点にとどまった(第27図-1~4)。あとの6枚の銅錢と本文説明との照合は写真〔図版29〕によられたい。1~4・7・8・10・13・19は「寛永通寶」である。寛永十三(1636)年、幕府が鋳造を開始して以降1860年にいたるまでの長年月にわたって継続して鋳造・発行されたもので、寛永～明暦までに鋳造されたものを「古寛永」、寛文～房治にいたるまでつくられたものを「新寛永」と称している。「古寛永」の字体はほとんどのものが太字・大型で「寶」の字の足がスのようになっているが、1と4がそれに該当するようである。それ以外の7枚は字体が細く「寶」の字の足がハになっており、「新寛永」と思われる。10の背文に「文」の字が確認出来るが、これは文錢と呼ばれ「新寛永」第一号のものである。江戸亀戸の錢座で大々的に鋳造されたもので、鋳造期間は寛文8(1668)午以降8年間である。6はサビのため錢銘が判読出来ないが、内面の窓がやや長方形になっており、8.0mmと7.0mmをはかる。14・15は「永樂通寶」である。初鋳が1408年の明鏡であるが、14は「樂」の字が摩耗しており、15は周縁を欠損している。16は1%が欠損しており表面も摩耗しているが「熙」と「寶」の字が判読出来ることから「熙寧元寶」と思われる。17は1%を欠損し3片に割れているが「元祐通寶」であろう。同じ字体のものが大宰府史跡や広島県・草戸千軒町遺跡より出土している。16・17とも北宋錢で、鋳造年代は「熙寧元寶」が1068年～1077年、「元祐通寶」が1086年～1093年にかけてである。ただし、長崎では幕府より特に許可を受け、萬治(1659)年に錢座を設けて貿易錢を鋳造している。この貿易錢は官錢(寛永通寶)との区別のため、北宋錢の錢銘を採用して數十種鋳造した。萬治二(1659)年～貞享二(1685)年までの25年間である。16・17はその長崎貿易錢の可能性もある。19~21は鉄片であるが、少くとも3枚分あり、うち1枚は「寛永通寶」である。いずれの銅錢も残存状態はあまりよくない。民俗例によると、芦辺町では葬式の時、白布・絹帽子を着せ酒と小遣として三文錢を入れるとある。墓石内出土の銅錢はその三文錢であろうか。

(片山)

- 参考文献 ①九州歴史資料館 1971 「大宰府史跡」他各年度発掘調査概要
②広島県草戸千軒町遺跡調査研究会 1977 「草戸千軒町遺跡」他各年度発掘調査概要
③象津市教育委員会 1981 「耶田近世墓発掘調査報告書」
④小川治 1966 「古錢の収集〈新稿〉」 德間書店
⑤沖田繁二 1934 「葉成功と長崎の小島鐵率」『長崎談費』十四編所収
⑥芦辺町 1978 「芦辺町史」
⑦坂詣秀一 1980 「図録歴史考古学の基礎知識」 柏書房

第1表 京塚遺跡出土銅鏡一覧表

No.	直 径	内 直 径	内面窓径	花 景	出 土 地 区	<単位 mm, g>		()は現寸法・現重量
						鏡	考	
1	25.0	20.0	6.0	2.8	1号墓	—	—	「寛永通寶」
2	25.0	19.2	6.0	3.4	5号墓	—	—	「寛永通寶」
3	24.5	19.0	5.8	2.6	北石組	—	—	「寛永通寶」
4	24.3	19.3	5.5	1.4	14号墓	—	—	「寛永通寶」
5	24.6	18.0	7.0	2.3	北石組	—	—	摩耗のため判読出来ず
6	23.2	—	8.0	1.5	北石組	—	—	サビ
7	24.8	19.0	6.0	1.8	5号墓	—	—	「寛永通寶」
8	22.7	18.5	6.0	3.1	5号墓	—	—	「寛永通寶」
9	24.0	18.4	6.0	2.7	5号墓	—	—	サビ
10	26.0	20.0	6.0	2.2	2号墓(北側木廻)	「寛永通寶」背文「文」2片	—	—
11	24.3	19.0	6.5	2.2	表土(大周辺)	—	—	サビ
12	23.2	18.3	6.8	1.5	北石組 No.6	—	—	サビ一部欠損
13	25.7	20.5	6.0	(1.3)	4号墓	—	—	「寛永通寶」2片 1/2欠損
14	26.0	21.0	5.6	2.7	北石組 No.5	—	—	「永樂通寶」3片
15	(22.0)	—	6.0	(0.8)	北石組 No.4	—	—	「永樂通寶」周縁欠損
16	24.2	19.5	7.1	(1.3)	7号墓	—	—	「嘉慶元寶」2片 1/2欠損
17	23.7	19.2	6.8	(1.0)	北石組 No.4	—	—	「元祐通寶」3片 1/2欠損
18	(21.0)	—	6.6	(0.8)	北石組 No.4	—	—	サビ 1/2欠損
19	—	—	—	—	4号墓	—	—	「寛永通寶」細片
20	—	—	—	—	4号墓	—	—	細片
21	—	—	—	—	4号墓	—	—	細片

不明金属器 (第27図・図版29)

不規形金屬器が2点出土している。1点は第27図にあるように、一端を欠くものの穿孔された小型で棒状の青銅器である。現長2.7cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm、孔径0.5cmをはかり、現重量は3.1gである。京塚中央付近の茶褐色土より出土した。もう1点は小型で現在半球形を呈しているが、欠損した痕跡があり復原形は不明である。何箇所も不定形の穴があいている。直径1.2cmをはかり、現重量は3.5gである。第11号墓北隅表土よりの出土である。2点とも用途は不明である。

(片山)



第27図 銅鏡拓影・不明金属器実測図

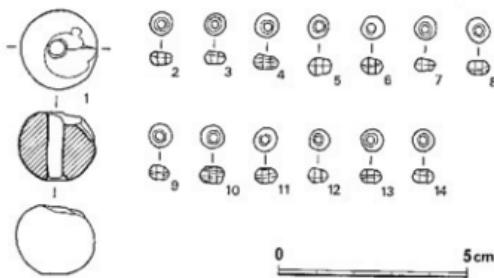
数珠 (第28図・図版29)

第2号墓墓壇底面付近にまとめて出土した玉類である。大丸玉1個と小玉12個がある。

大きい玉は、黄褐色のアメ色を呈し、メノウ製品と考えられる。径2.1cm、穿孔のある上面はやや欠けているため、高さは1.8cmである。孔は段をもたず貫通しており、孔径4mmを測る。表面は磨く際にできたのか、それとも風化のためか、キズのような細かい孔が多数あり、白っぽくなっている。重さ9gを測る。小玉は、全てやや白く潤った透明のガラス製品である。白く表面が風化したものは、一見貝製品のように見える。ルーペでみると、中に小さな気泡が多数包まれているのが観察できる。孔のある面は、なにかで擦られ平坦面をもつ。表面は製作時にねじられたのか、細かい線が入る。径は5.4mm~6.5mm、高さ3.4mm~4.5mm、孔径2mm、重さ0.2g~0.3gを測る。孔径は全て同一である。

数量的には掘り下げ時に少し見のがした可能性もあるが、これらはひとつにまとまった数珠であったと考えられる。

(宮 岛)



第28図 数珠実測図

その他の土器・陶磁器（第29図・図版30～34）

近世以前の土器・陶磁器で、造形に直接関係しないと考えられるものについて、ここでとりあげる。該当するものには、須恵器・土等器・中世陶器・青磁・明染付・李朝陶磁器があり、そのうち実測可能な17点を図化した。図化していないものについても写真図版を参照されたい。

須恵器

破片は200点ほどあるが、高台坏2個体と把手付鉢を図化した。

坏（1・2）2の高台は小さく、1の高台はやや長めでふんばりを有する。休部の下位はヘラケズリ（1はロクロ右廻り）され、他は回転ナデ仕上げ。1の内面には一部に静止時のナデが見られる。2は復原口径13.4cm、器高3.1cmを測る。両者とも胎土に小石英砂を含むが、焼成は良好である。

鉢（3）把手を体部に貼付ける鉢である。 $\frac{1}{4}$ ほどの破片から図化した。復原口径は45cmを割る。外反する口縁は外方を肥厚し段がつく。体部は、上部が直立ぎみで下部が緩やかにすぼまる梨形。外面は格子目文タタキのあと、頸部から口縁裏面まで回転ナデ仕上げ。体内面には同心円文当て具痕が残る。把手は、径2.4cmの粘土紐を「U」字形に曲げ横位に貼付け、指掌形している。「U」字形の把手の長さは11cm、幅4cmを測る。色調は灰色を呈するが部分的に黄色味を含んでいる。小石英砂を含むが、焼成は良好。

土師質土器

破片は115点あるが、小豆1、擂鉢1、火鉢3を実測した。

小豆（10） $\frac{1}{4}$ ほどの破片から図化した。復原口径7.7cm、器高1.4cm、底径5cmを割る。体部はヨコナナデ仕上げ、底部は回転糸切りされる。茶黄色を呈し、白色・赤色砂を含み、焼成はやや甘い。石縫造構造上。

擂鉢（11）上方が平坦な口縁部破片で、風化をうけやや磨滅している。内面には横位のハケ目と5本の筋目がはいる。淡茶灰色を呈し、細石英砂を若干含み、焼成はやや甘い。

火鉢（12～14）12は内寄する口縁部破片で、上方は平坦になっている。外方には丸味をもつ突帯を二条貼付け、突帯間に菊花文のスタンプを施す。器面は全体にススけており、ヨコナナデ仕上げ。暗茶色を呈し、胎土に小赤色砂を含み、焼成普通。13は直立ぎみで下位がやすぼまる形状の体部破片。先端が丸味をもつ突帯を二条貼付け、間に正菱形のスタンプを施す。突帯下には沈線がシャープにはいる。復原突帯径は28.2cmを割る。外面は研磨、内面はハケの上部をナナデ消している。ハケはむかって左から右方向の横位ハケで、上方から下方へ施している。暗茶色を呈し、小石英砂を若干含み、焼成普通。14は復原突帯径が51cmを測る大形の火鉢破片である。突帯を中心として、上位は丸くのび肩が張る形状で、下位は斜めにまっすぐぼまる。先端が細くなり平坦面をもつ台形状の突帯を二条貼付け、上下にはケズリ状の沈線がめぐる。突帯間に楕円形と5型の木葉文のスタンプを施す。突帯間中位から上部にカマボコ形の透かし窓があったことがわかるが、破片であるためその全形は知り得ない。外面は丁寧に研磨され

内面は横位ハケのあと部分的にナデ消している。茶褐色を呈し、細砂を含み、焼成は良好。

中世陶器

中世陶器と思われるものは 8 点ある。そのうち 3 点固化した。

謎 (15) 上方が肥厚し、外方が平坦な口縁部破片。回転ナデ仕上げ。暗茶色を呈し、小石英砂を含み、焼成良好。第11号墓より出土。

擂鉢 (16・17) 両者とも筒前端の擂鉢口縁部片である。16の口縁上方は立ち上る感じをもち、体部との境は外方に突出する。内面の筋目は 9 本で、付近に過度の使用のためか磨滅している。回転ナデ仕上げ。口縁外面は茶灰色だが、他は黄茶色を呈する。黒茶色の付着物が部分的に認められ、スヌケたような状態が見られる。大きめの砂粒を含む。焼成良好。17は外方が平坦になった口縁の擂鉢片。筋目は 5 本まで確認できるが、破片であるため総数は不明。筋目付近は沈線状の溝が二条はいる。暗褐色～暗茶色の色調で、器内は暗灰色を呈する。小石英砂を若干含み、焼成は良好堅致。両者とも第11号墓より出土。

青磁

50点の青磁があるが、そのうち 6 点を固化した。

碗 (4・5・8) 4・5 は口辺付近の破片。4 はまっすぐにのみ先端を丸める。5 は端部を外寄し尖り気味におさめる。両者ともオリーブ色の不透明なガラス質釉を厚くかけている。貫入は見られない。4 は第11号墓と大土壙から出土し接合した。8 は体部から底部にかけての破片。淡緑色の釉色で貫入はない。体外面は片彫りの蓮弁文がはいり、高台との境は削られ釉がたまって沈線状になっている。高台はいわゆる竹の節高台にちかく、釉は内面中位までかかる。見込には瀬線をいれ、草花文を押印している。碗には他に外寄する口縁で内面に雷文をもつものなどもある（図版31）。

皿 (7・9) 7 は底が削られややあげ底になった皿破片。見込には四条の筋目による文様を描く。釉は淡緑灰色のガラス質で光沢をもつ。第11号墓出土。9 は高台付の皿破片で、疊付部分も含めて全面に、淡緑色で不透明な釉をかける。第11号墓出土。他に固化しなかったが見込に飾によるジグザグ文様を有するものもある（図版31・33）。

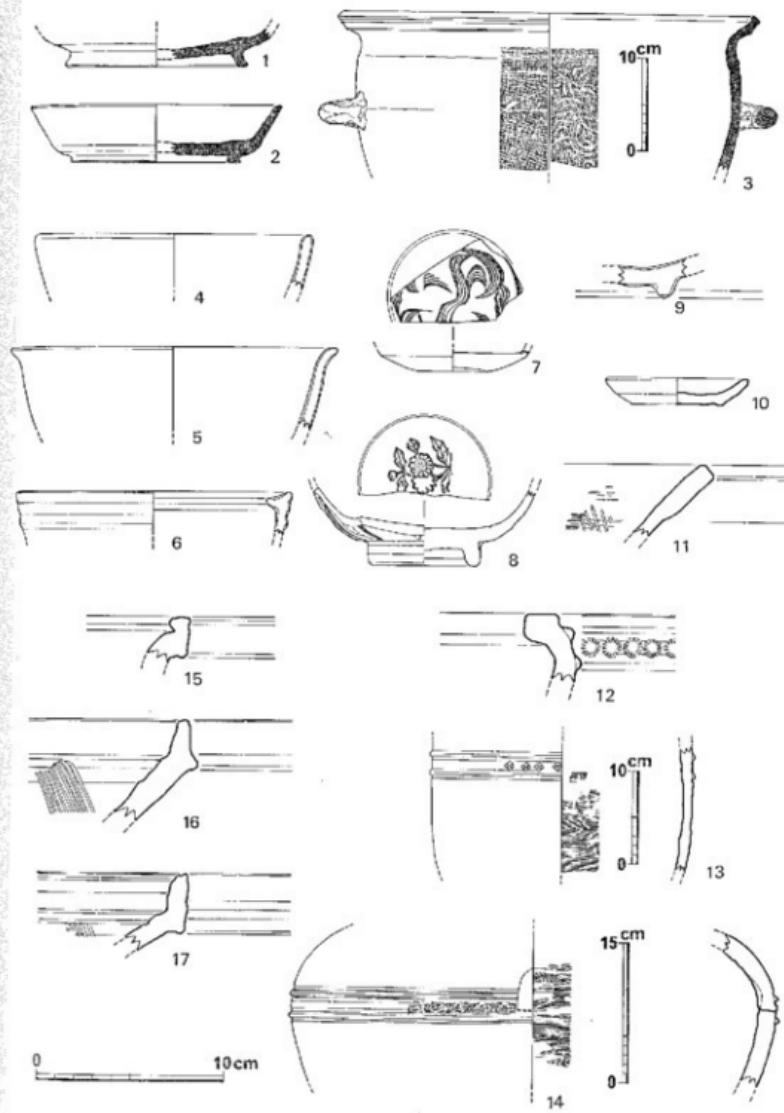
香炉 (6) やや外傾して開き、内面に突出する香炉の口辺部片。外面は凸凹に削ってある。淡緑灰色のガラス質の釉を厚くかける。全面にこまかい龜甲状の貫入がみられる。3 片出土し同一個体であるが接合しない。

明染付

碗（図版32）1 片だけ出土。やや青味をもつ白磁に染付を施しているが、小片であるため何を描いたのか文様ははっきりしない。内面に貫入がはいる。

李朝陶器

碗（図版32）14 点ほどある。いわゆる三島手の陶器で、滑青沙器ともいう。唐手・刷毛目・象嵌三島手茶碗の破片である。



第29図 その他の土層・発掘器実測図

小 結

須恵器は、高台付坏と把手付鉢を汎化したが住に坏蓋片もあり、7世紀後半代～8世紀代のものである。1は7世紀後半、2は8世紀前半頃の年代に比定される。3の把手付鉢は、類例^(註1)を福岡県大宰府史跡整地査中・下層出土鉢に求めることができる。年代が7世紀後半代から8世紀初頭頃の遺物と共に伴している。口縁のつくり、把手が体上部につく点など若干の差異があるが、横に把手を貼付けるやり方は同じで、まだ類例に乏しいが大宰府のそれに近い時期を想定できよう。

土師質上器には、小皿、擂鉢、火鉢がある。14のようなカマボコ形の透かし窓をもつ火鉢^(註2)は、広島県草戸千軒町遺跡に類例があり、室町時代に包括される遺物である。他の擂鉢・小皿も同時期に合めて考えてよからう。

中世陶器には、甕、擂鉢がある。擂鉢は備前焼で間壁忠彦氏の研究によれば、形状の特徴から16はIV期、17はV期に該当し、15世紀から16世紀の所産である。甕は常滑焼か。

青磁は、同安窯系のものは横目のジグザグ文をもつ皿片だけで、他は全て越窯系に属する。7の皿は、森田勉・横田賛次郎氏分類の皿I-2類で、南宋代の所産であろう。8の甕^(註3)は、上田秀夫氏分類のB II b類に該当し14世紀末頃から15世紀初頃に位置づけてある。4・5は無文の碗で、釉をぶ厚くかける資料である。9とともに15世紀代に包括できよう。

明染付は小片であるため詳細は不明。李朝陶器は三島乎といわれるもので、田中豊太郎氏によれば、「高麗朝の象嵌青磁を基として生まれ、李朝初期第15・16世紀の所産」というのが定説」としている。

以上概観した内容をふりかえれば、年代的に奈良時代を中心とした時期と、室町時代を中心とした時期の遺物のまとまりが把握できる。前者は近接した位置に区分寺跡が指定されていることと密接なつながりが想定でき、後者は京塚遺跡の墓域利用の上限が室町時代まで遡る可能性を示唆しているように思える。

(宮崎)

註1 石松好雄他「大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報」九州歴史資料館(1980)

註2 松下正司他「草戸千軒町遺跡第11～14次発掘調査報告」広島県教育委員会(1976)

註3 間壁忠彦「備前」「世界陶磁全集3 日本中世」小学館(1977)

註4 森田勉・横田賛次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料研究論集4』九州歴史資料館(1978)

註5 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易専業研究No.2』日本貿易陶磁研究会(1982)

註6 田中豊太郎「三島」「南蛮大系30」平凡社(1976)

石塔（第30図～第37図・図版35～42）

石塔としての形を保つものではなく、石塔の各部分が、石組の中に混じったり、集められたりした状況で出土している。石塔の種類には宝瓶印塔、五輪塔、無輪塔があり、数量的には、宝瓶印塔の構成部分が最も多い。又この3種類の他に、下部を地中に埋めて立てられた自然石の板碑が4点ある。石塔の石質は、玄武岩が大半を占め、僅かに流紋岩も用いている。概して造りは簡素で、仕上げもあり丁寧ではなく、工具痕を残す例が多い。

又、上面や側面に、+、二、|、一の印を刻む場合がある。「+」を刻印した 宝瓶印塔に就いては、キリスト教の墓とする説がある。しかし、キリスト教伝来以前の1378年に建立された宝瓶印塔の笠軒部に、「+」を刻印した例があり、キリスト教との関係は考え難い。当遺跡出土の石塔部分には、刻印のある側の面の仕上げが、他の面と異なる例もあり、これらの刻印は正面を示すものと考えられよう。

宝瓶印塔 相輪、笠、塔身、基壇が各々32点、24点、10点、29点出土している。

相輪（第30図1～第32図16・図版35, 36）

総高は30cm～35cmを測るものが大部分を占めるが、24.4cm, 44.2cmのものもある。九輪は省略され、諸花と花合、諸花と伏体は縦刻によって区別をつけるだけと簡略化が著しい。形態的には、中央部の断面形が方形（A）か円形（B）かによって、かなりの相違がある。特に宝珠の形は多様であり、中央部の断面が方形の場合、宝珠は木米の形より角張るもの（1・2・3）、丸味を帯びるもの（4）、先端が尖らず丸いもの（5）、高さが低いもの（6）、宝形（7）、あるいは円錐形（8）と変化に富む。断面が円形になると、円錐形が多く、木米の形に近いものは1例（14）、丸形は1例（15）のみである。又、相輪下部には、笠との接合のため、方柱状か円柱状の柄がつけられている。

笠（第32図17～第33図26・図版36～38）

総高15cm～20cmを測る。装飾性が乏しく、質素な造りとなっている。一般的なものと異なり、隅飾りと軒を区別せずに刻み出し、縦刻によって輪郭を描く例が大半を占めるが、彫り込みにより輪郭を表したもの（20・21）、装飾が全く無いものもある。隅飾りと軒の区別がない例は、奈良の勝本町にも存在し、一つの地方色とも考えられる。又、軒下の段は2例以外はすべて省略されている。笠上面には、相輪との接合のために、方形や円形の内穴がある。

第2表は底面から隅飾りまでの高さと、隅飾りの傾きの関係を表したものである。隅飾りは15度～30度外方へ傾くが、特に15度前後、20度前後へ集中する。又、角度の差に従い、軒上の段数に相違がみられる。15度前後の傾きをもつものは1段～4段であり、20度前後になるとほど5段に統一される傾向がある。30度以上傾くものは1例（25）であるが、これは3段であり、形態は他より更に簡略化されている。このような傾きと段数の変化は、作られた時期の違いによるとも考えられるが、大部分が遺構に伴わず、一ヶ所に集積された状況であったため、明ら

かにはできない。

塔身（第33図27～30・図版39）

高さが14cm前後の正六面体か、側面が台形に近い綾長の直方体をなす。仕上げは、側面だけか又は全面に施している。但し、30は他に比べ高さが低く、別個のものとも考えられる。

基礎（第34図31～第35図41・図版39, 40）

臺壇の北東部に配列されていたものと、石積の中に混在していたものがある。一边25cm～30cm程の正方形、台形、長方形の平面で板状をなし、上面は平坦か、丸味を帯びる。下面は、上面に比べると仕上げは粗雑であり、荒削りのままのものもある。装飾は全く無い。

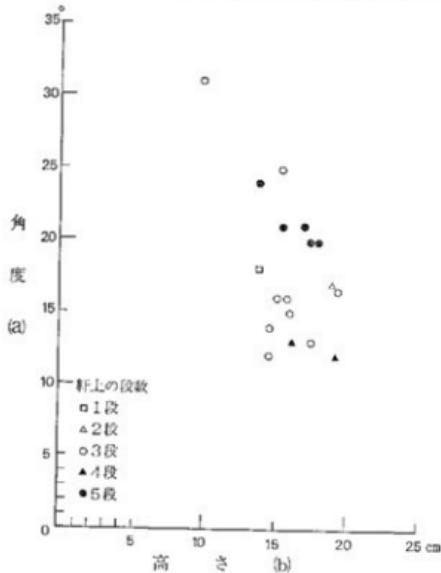
五輪塔 空輪・風輪・火輪・水輪が出土している。

空輪・風輪（第35図43～46・図版40）

空輪・風輪を一石で作ったものが4点出土している。総高14cm前後を測る。形態の面では、空輪すなわち空吹に粗造がみられる。頭頂に尖りがあるもの（43・44）と無いもの（45・46）があり、尖るもののは微ですばまる。46は、中央部に擦り込みを1本入れることで、空輪と風輪を区別している。又、火輪との接合のため方柱状・円柱状の柄がつけられている。

火輪（第36図47・図版41）

第2表 宝蓋印塔笠 鋼鋸りの高さと角度の関係



1点出土している。高さ13.2cm、平面形は1辺22.8cmの方形を呈す。屋根の勾配が緩く、軒は中程よりも四隅が厚くなり、僅かに反っている。又、上面には空・風輪との接合のため円形の穴がつけられている。

水輪（第36図48・図版41）

1点出土している。高さ13.6cm、最大径18.5cmを測る。一般的なものと異なり、球形を成さず、そろばんの珠に近い形である。上面、底面の直径と高さが等しく、安定感がある。

無縁塔（第35図42・図版40）

塔身と基礎で構成されるが、当遺跡では塔身のみ1点出土している。総高33.9cmの丸長で、先端は円頂をなす卵頭形の塔身である。頭頂部付近の最大径は17.5cmを測る。下部には基礎との接合のために方柱状の納がつけられている。

その他（第36図49・図版41）

石塔の部分と思われるものが1点出土している。平面形は1辺20cm程度の方形を呈し、高さは15.2cmを測る。側面の勾配は急で、丸味をもつ。上面に方形の穴があり、台座とも考えられる。

彫線のある自然石板碑（第36図50～第37図53・図版41、42）

自然石を利用した板状の碑が4点ある。いずれも、下部を地中に埋めて立てられた状態であった。石英玄武岩製で、平坦な面の縦長の方向に幅1mm程度の彫線を10本前後刻む。又、下方に交差する彫線1本を刻む場合もある。彫線の間隔は、いずれも3mm前後である。（第3表）

（松 尾）

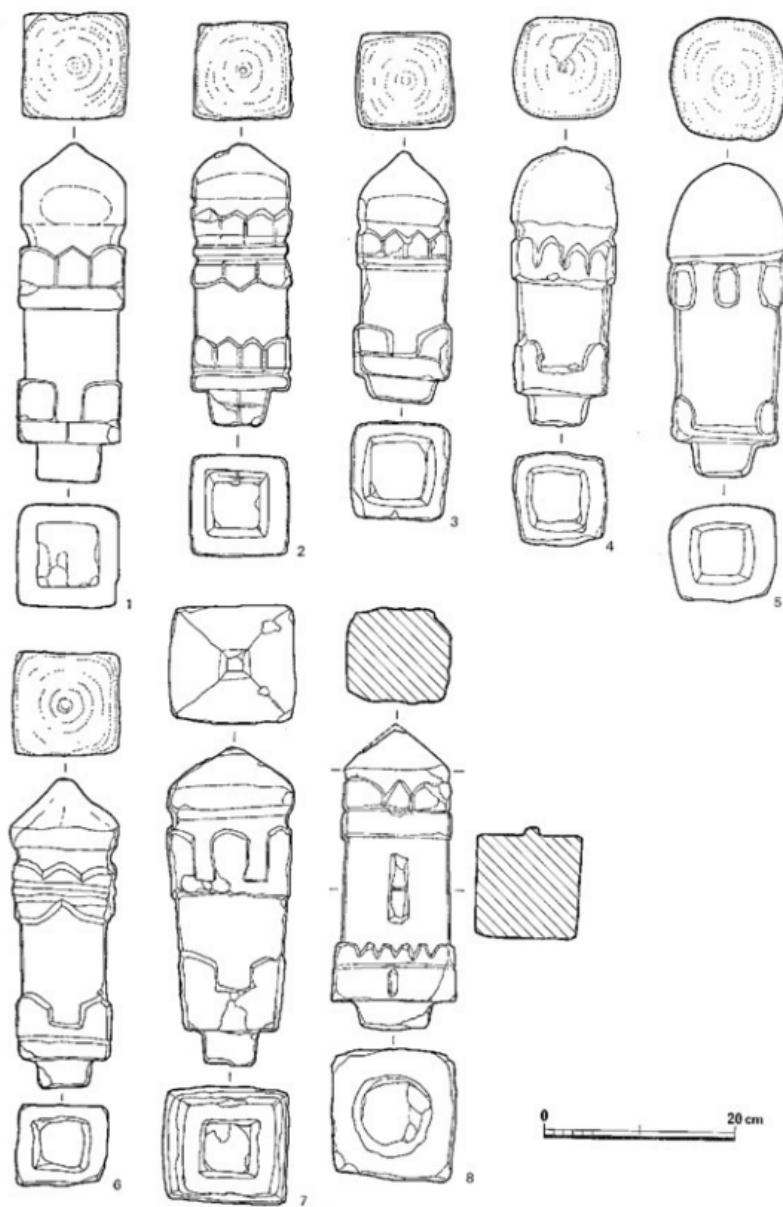
註1 『戸辺町史』 戸辺町 昭和53年3月

註2 熊本県菊池市寺尾町の大円寺跡に建つ宝置印塔には、紀年銘「火授二年卯月日造忍」

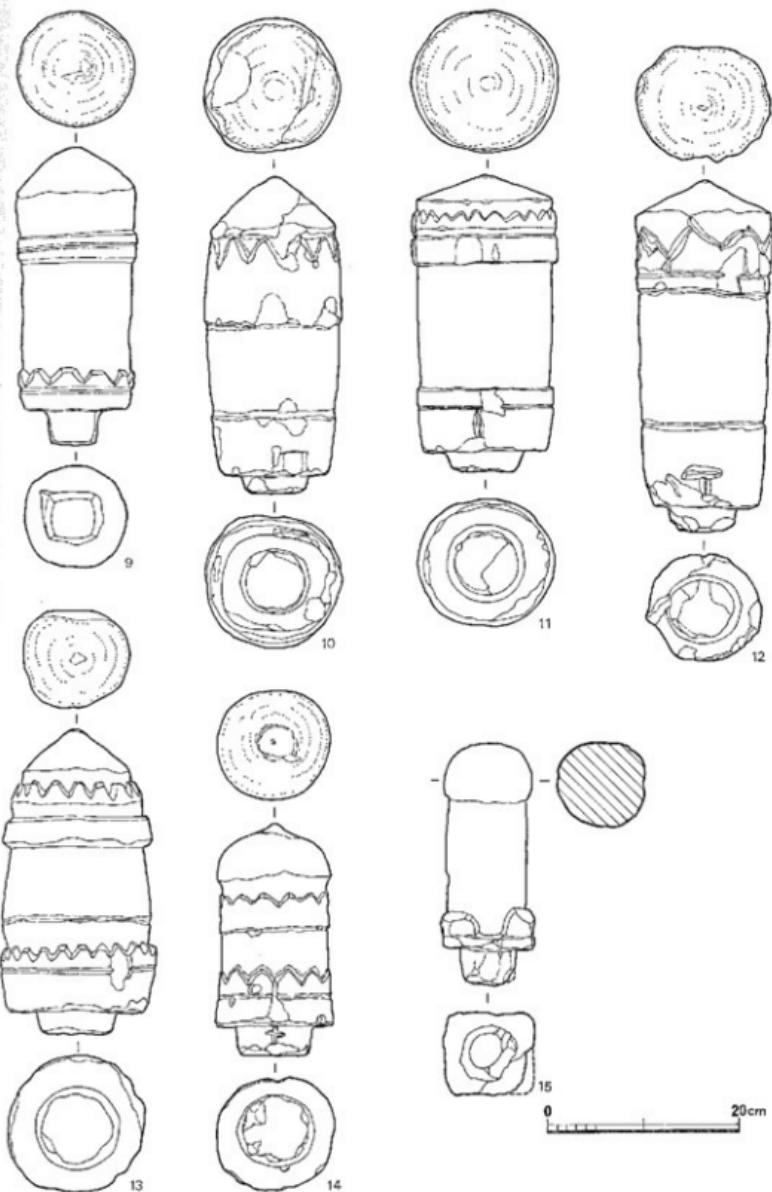
（1378年）が刻まれている。『熊本県の文化財 第2集 建造物・絵画・考古資料』（熊本県教育委員会 昭和55年）に収録。

第3表 自然石板碑一覧表

No.	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	形態の特徴
50	65.3	39.0	12.0	奇形。断面は下部が最も厚く、先端に向かって薄くなる。平らな面に彫線を12本、横方向に1本の彫線を刻む。
51	43.1	35.0	7.2	椭円形。自然石の左側・下側を削る。平らな面に彫線を10本刻むが、右半分は削りが深く、引き直したと思われる。
52	65.9	39.4	11.4	長縮円形。断面は、下部が厚く、先端に向かって薄くなる。表面上部は剥落。平らな面に、彫線を縦方向に10本、横方向に1木刻む。
53	58.8	32.5	10.0	舟形。彫線9本を刻む。上部は風化しており、明瞭ではない。



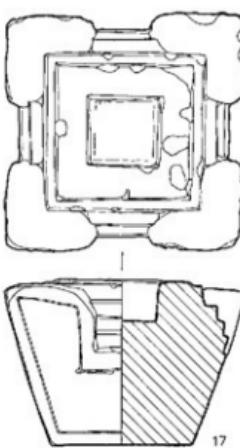
第30圖 宝瓶印塔 相輪A寬測圖



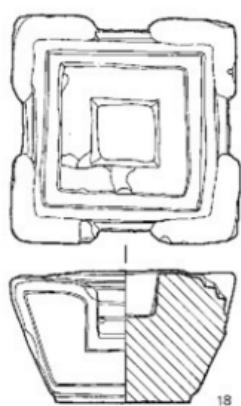
第31図 宝鏡印塔 相輪B突出圖



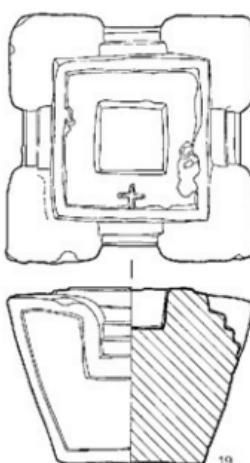
16



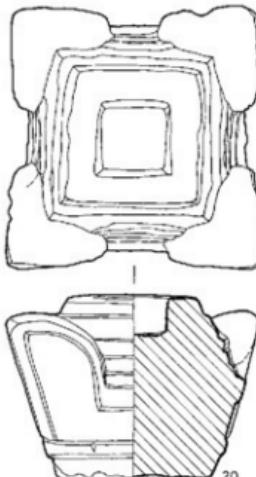
17



18



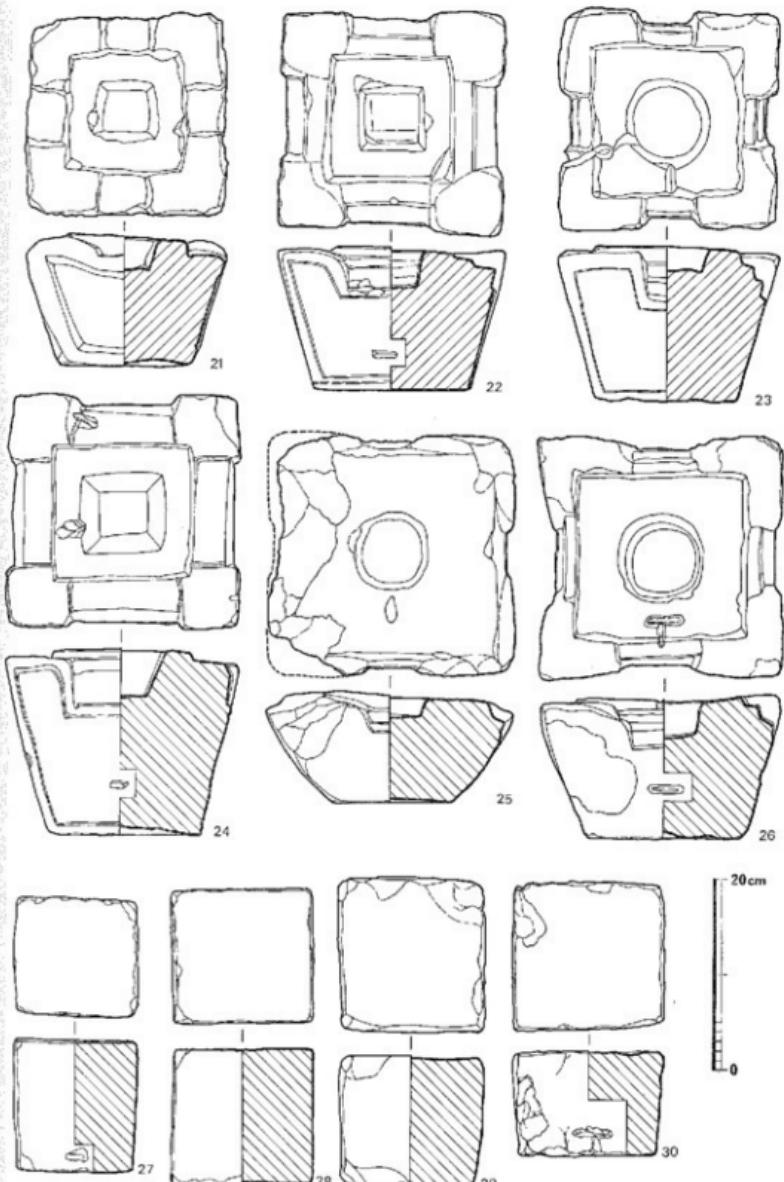
19



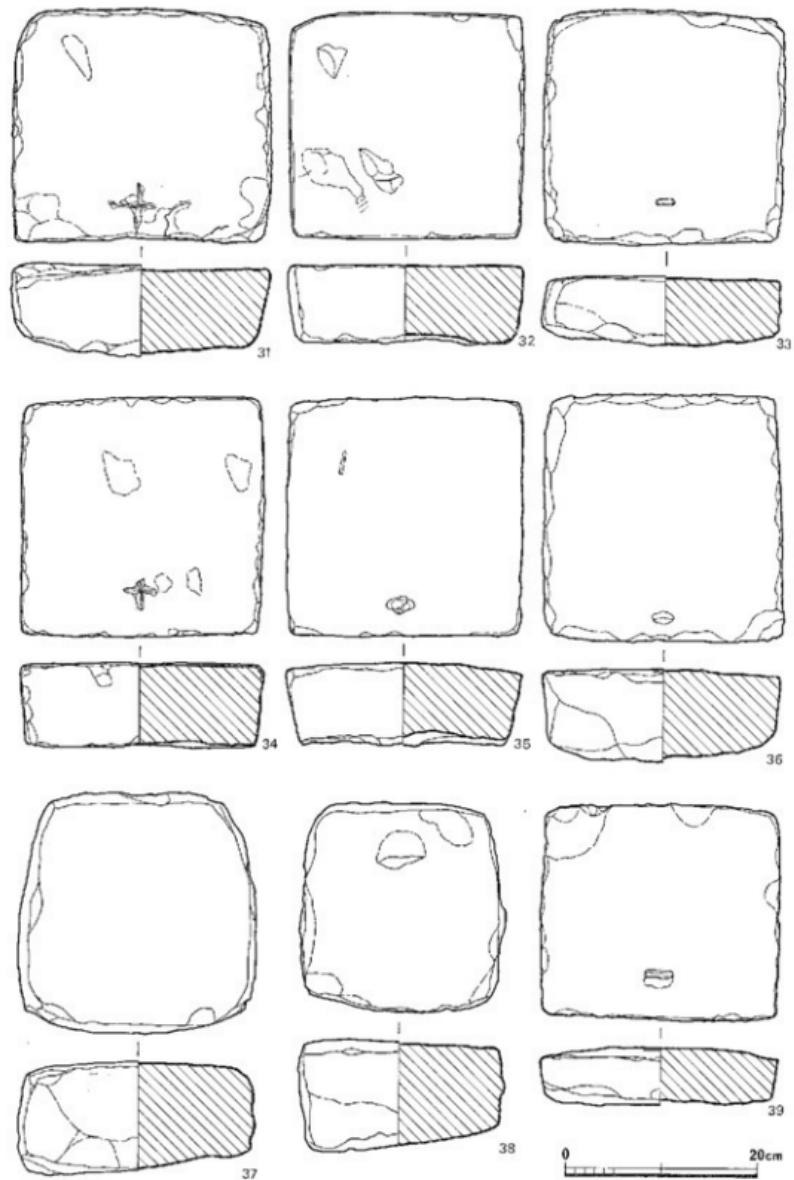
20



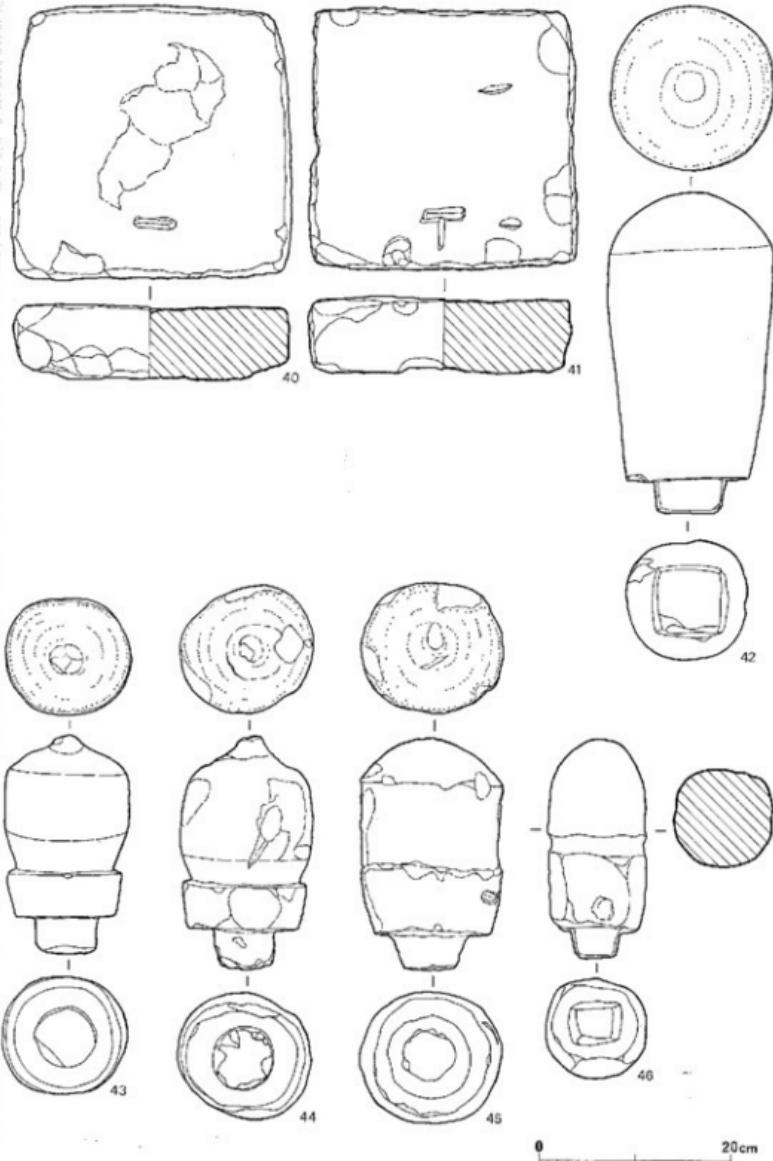
第32图 圆筒形塔 相轮B・笠实叶网



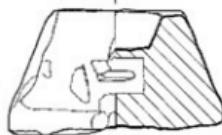
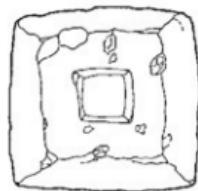
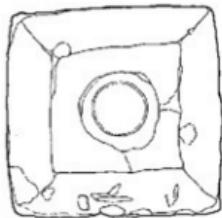
第33圖 宝幢印塔 笠·塔身實測圖



第34図 宝島印塔 黒岩実測図



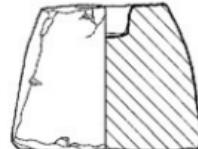
第35圖 宝瓶印塔 基盤・無缺者 塔身・五輪塔 空・黑輪尖測図



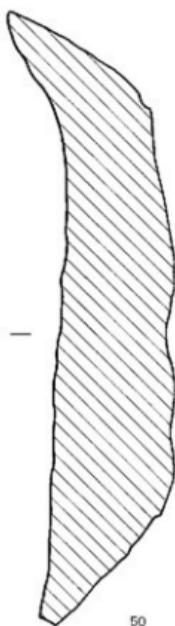
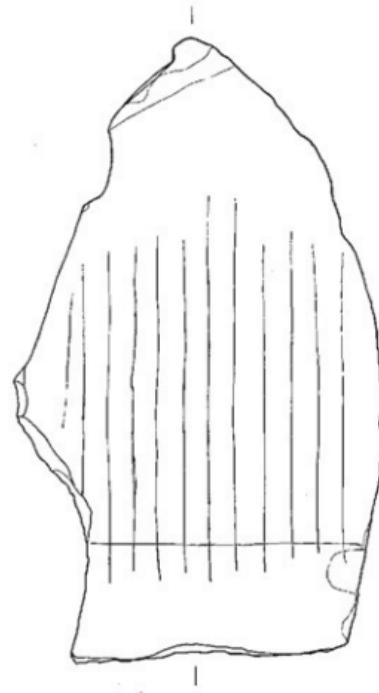
47



48



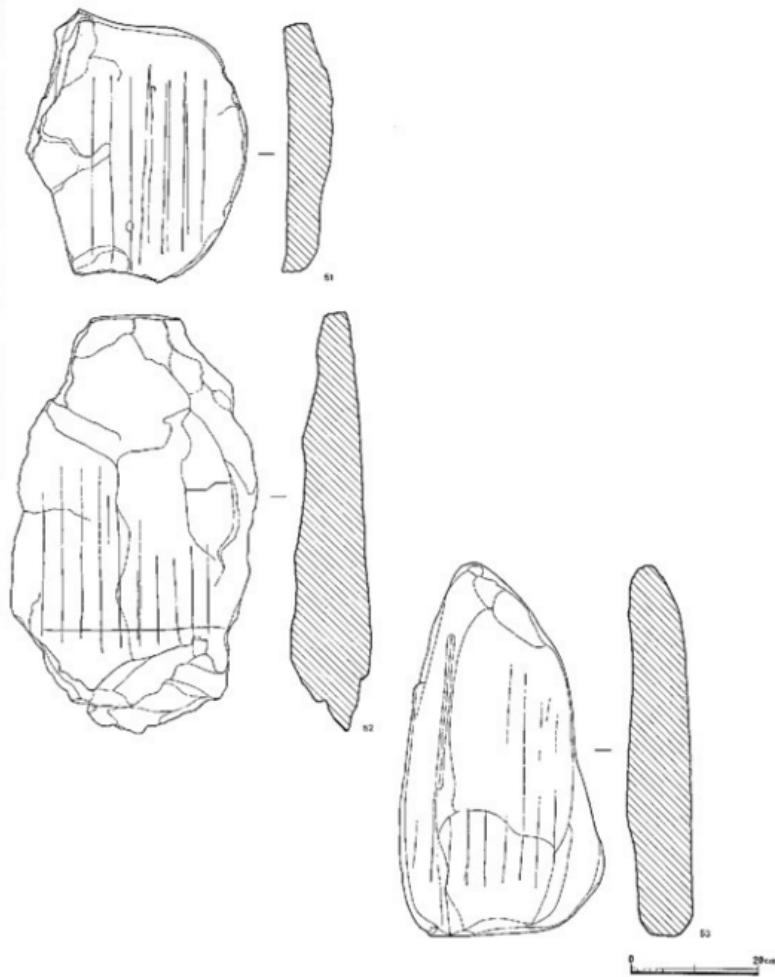
49



50



第36圖 五輪塔・自然石板碑尖頭圖



第37圖 自然石板碑實測圖

IV まとめ

京塚遺跡の、現地での調査は、昭和57年6月18日、無事終了することができた。これもひとえに地元芦辺町の関係者ほか、多くの方々の御援助と御協力によるものである。さらに、土地所有者、官坂組の宮坂甚太郎氏ほかの方々にも、工事の延期や、調査にあたっても便宜をいただくななど、大層お世話になった。これらの、多くの方々の御助力によって、当調査報告書刊行のはこびとなったことに対し、最後になったが、心から御礼を申し上げる次第である。

さて、この報告書は、調査に至る経緯の項で詳述しているように、資材置場造成工事に先だって実施した調査記録の報告である。造構・造物については、本文中のそれぞれの項に詳しいので、ここではそれらの結果をふまえて、この回の調査のまとめをおきたい。

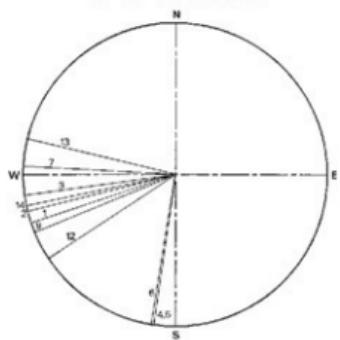
先述したように、今回は15基の墓を中心とする調査を行った。その結果、これらの墓は、当初考えられていたような、中世まで遡るものではなく、ほとんどが江戸時代のものであることが判明した。削葬してある陶磁器・銅鏡からみて、江戸時代前期より古くなるものはなさそうであるが、積石塚状のものについては、断言がしがたい。以下、これらの墓を中心として、知りえたことと、それから推測されることについて述べてみたい。

まず、墓の向きについてであるが、15基中、向きの明らかであったものは11基である。第4表に示したように、多くのものは西側を向き、南側を向くものは第4号墓～第6号墓の3基である。墓の向きについては、墓標のあり方が第一の決め手であるが、銘などがない場合は確定的ではない。また、第13号墓のように、銘が彫られていても、台座もろとも全体的に動かされた痕跡が強く、疑問の残るものもある。墓標に使用された石の向きのほか、埴輪の迎部のあり方と、「ひざ石」の有無などによって向きを考えた。西側に向くものの中には、江戸時代前期・中期の磁器を副葬するものもあり、時代による向きの傾向については断定できない。京塚遺跡のある地形が、南西方向に向いて低くなるので、單にその前面の開けた方に面したにほかならない、と言えるかも知れない。

墓の、積石や埴輪などの地上施設の規模はまちまちである。大きなものとしては、第11号墓のように、 $3.2m \times 3.5m$ ほどのものがあり、小さなものは $1.0m \times 1.2m$ 、 $1.25m$ 四方のものなどがあり、規模の大小からの特定の傾向は認められないようである。

次に、墓壇についてであるが、墓壇を持つものは、第1号墓～第7号墓・第9号墓・第14号墓の9基である。以上のものの墓壇の規

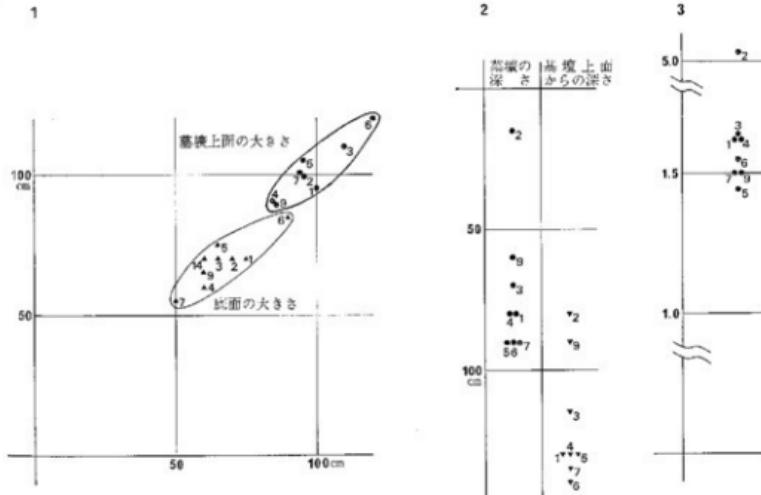
第4表 墓方位表



墓について図化したものが、第5表1である。これでは、墓壇上面の、掘り込み面での大きさと、底面での大きさを、東西・南北方向での最大値をとって表わした。なお、全ての墓壇は、ほぼ円形に掘り込まれており、底面もほぼ円形を呈している。この表から見ると、掘り込み部分の大きさは、東西方向で85cm～120cm、南北方向で90cm～120cmの間にあり、その中心は100cmほどの直徑をもつものであることが知られる。また、底面の大きさについて見ると、第6号墓だけが掘り込み部と同じように大きな値を示すが、その他のものは東西50cm～70cm、南北は55cm～75cmの間にあり、特に、60cmから70cmの間に集まっている。さらに第5表2のように、墓壇上面から墓壇底面までの深さは、8基中5基までが130cmから140cmの深さになる。また、墓壇の深さと、墓壇上面から墓壇の底までの深さの比は、1.5前後を示すものが多い。(第5表3)。埋葬に際しては墓壇の深さの半分ほどの上部施設を作る、という意識でもあったものだろうか。

以上の墓壇の状況は、底面がほぼ平らで、平面は円形であることから、埋葬時における棺としては丸い木製の桶が考えられる。この中に、膝を曲げてかがんだ状態で埋葬したものであろう。棺材は全く残っておらず、金具の類も全く認められなかった。酸化腐食してしまったものか。あるいは、最初から金具を使わず、竹などの籠でしめたものを使用したものであろうか。また、第5表1でみると、墓壇底面は50cm×55cmを最小とし、60cmから70cmの間に多いのは、桶の底がほぼこれにおさまるような、大まかな規格のあったことを窺わせる。そして、この大きさは、埋葬された人が成人であることを示しているようであり、第3号墓・第9号墓・第14号墓に副葬された盃をも考えるとき、男性である可能性が大きいものと思われる。

第5表 京阪遺跡 墓壇一覧表



第6表 京深遺跡 墓誌一覧表

墓の大きさ 東西×南北 (m)	墓標の 有無 種類	墓標の大きさ(m) 東西×南北・深さ	墓誌底面の 大きさ東西 ×南北(m)	墓地上面 から底面 までの深さ	出土遺物	墓の向き
1 2.1×1.5	無	1.0×0.95-0.8	0.75×0.7	1.30	寛永通寶	S-71°-W
2 2.3×2.7	無縫塔	0.95×1.0-0.15	0.7×0.7	0.80	寛永通寶	S-76°-W
3 1.5×1.8	板石	1.1×1.1-0.7	0.65×0.7	1.15	無	S-82°-W
4 1.3×1.5	板石	0.85×0.9-0.8	0.6×0.6	1.30	寛永通寶	S-8°-W
5 1.6×1.4	板石	0.95×1.05-0.9	0.65×0.7	1.30	寛永通寶	
6 2.2×1.9	自然石	1.2×1.2-0.9	50.9×0.8	1.40		S-9°-W
7 1.2×1.5	板石	0.95×1.0-0.9	50.5×0.5	1.35	嘉慶元寶	N-87°-W
9 1.25×1.25	板石	0.85×0.9-0.6	50.6×0.65	0.9	四・五	S-67°-W
10 (1.8×2.2)?	無				肩津焼	(S-57°-W)?
11 3.2×3.5	板石(?)					(S-79°-W)?
12 1.0×1.2	板石					S-56°-W
13 2.6×2.6?	無縫塔 「竹翁」路					N-76°-W
14 1.2×1.5	板石	1.4×1.8-0.7 (復原)	0.6×0.7	0.85	寛永通寶 四・五	S-78°-W
15 1.7×2.0	板石(?)					(S-84°-W)?
16 2.0×2.1						(S-83°-W)?

遺物について見てみると、調査地域の表土層や石組、積石の中などから、須恵器・土師質土器・中世陶器とともに、青磁・染付といった輸入陶磁器までが出土している。これらは第29図に示したところであり、細片は図版31・図版32に収録し、便々については本文中に詳しい。壺瓶が、対馬とともに、朝鮮半島と九州の間にあるという地理的条件を考えれば、中國・朝鮮の陶磁器の多いのもおかしくはない。さらに、古墳時代以降、壺瓶の中心地として栄えた場所に近いことをも考えれば、須恵器のはか、各種の陶磁器が出土しても不思議ではない。しかし、近世になり、墓地に副葬されたものを見ると、陶磁器の供給地が限られているようにも思われる。すなわち、第3号墓の蓋・第9号墓の皿と盆・第13号墓の皿、向付、盆、それに第14号墓の皿と盆のすべてが、平戸松浦領内産の品である、ということである。副葬品として陶磁器を持つ墓の数が4基しかなく、副葬品の数も少ないので、断定はできないが、江戸時代の、高麗產品の契約ということの結果でもあるものか、物品交易の実態の一端を示しているように思われる。

最後に、この墓地全体について見ると、底にも二種類あることが觀察される。第1に、地上部の形で分けると、基壇を四角に兼ねて作ったものと、積石塚のように石を積み、周辺がしっかりしていないものとに大別できる。さらに、埋葬施設としての墓標を持つものと、持たない

ものとがある。そして、基壇のあるものには墓壇があり、これは、確実に基であることが明瞭である。しかし、積石塚のようなものには墓壇ではなく、単に石を集めているのみで、これらの集石中にも、埋葬に関係したことを示すような痕跡は認められない。しかし、一応、その中央部付近に、墓標のような感じで自然石を立て、あるいは第13号墓のように館のある無縫塔を立てている。このように、埋葬のための施設を持たないにもかかわらず、一応、墓としての外形だけはととのえていることから考えれば、陪塚としてとらえることも可能なのではなかろうか。北東部に検出した石組造構も、単に地上部分のみの施設であって、埋葬との関係は認められなかった。ここに、お経らしきものを書いたと思われる板石を立て並べているが、この施設も説るための施設と考えた方が理解しやすい。古くから、聖なる地域として識別されていた場所であり、信仰の対象とされていた施設と考えて間違いないのではなかろうか。特定の人などを祭るための施設ではなく、聖なる地としての信仰の対象であって、特定の個人に対しては、陪塚としての施設を築いた、と考えられるのである。

(藤川)

参考文献

- 「蓮花寺跡・祖良領景翁跡」 熊本県教育委員会 熊本県文化財調査報告書 第22集 1977年
「玉泉寺」 熊本縣教育委員会 熊本縣文化財調査報告書 第41集 1980年
「下城遺跡I」 熊本県教育委員会 熊本県文化財調査報告書 第37集 1979年
「靈仙寺跡」 佐賀県東脊振村教育委員会 登録調査概報 1979年
「靈仙寺跡」 佐賀県東脊振村教育委員会 文寶脊振村文化財調査報告書 第4集 1980年
「山中遺跡」 伊万里市教育委員会 伊万里市文化財調査報告書 第12集 1982年
「小路遺跡」 芦刈町教育委員会 芦刈町文化財発掘調査報告書 1980年
「稚木山遺跡」 北九州市教育委員会 北九州市文化財調査報告書 第24集 1977年
「小田山墓地の調査」 福岡県教育委員会 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書
第1集 1976年
「般若寺墓塔群」 静岡県教育委員会 静岡県文化財調査報告書 第24集 1982年
「仏教考古学講座」 第一巻 1976年
「石造美術入門」 1976年
「勝本町の文化財」 勝本町教育委員会 勝本町文化財調査報告書 第1集 1977年

付

竹翁首座と天徳庵

國分の天徳庵は臨済宗で、山号を西原と言っていた。「壱岐國統風土記」には本尊 釈迦座像長4寸8分、古釈迦座像長7寸余

客殿 南向 茅葺梁行2間2尺 柏行3間

廊下 同 梁行1間 柏行1間

庫裡 同 梁行2間 柏行3間

境内 東西69間、南北33間、周囲250間

内寺地墓所山林圃共

寺地 東西10間 南北8間

墓所 同 10間 同 4間

山 同 37間 同 13間

庵領 3畝

当庵は護國山の末寺なり、壱岐梵刻帖云国分村天徳庵本尊釈迦立像7寸、建立の年相不知、安国寺末寺以来 300年（中略）

開基寿峰和尚

前住竹翁浦首座

前住徳翁隆首座

前住庸山宗申藏主

と、見えている。

住職については、天保14年改（1843）の安国寺「塔末歴代記」に

開山寿峰澄和尚 8月25日年不知

前住当庵竹翁浦首座 承應3午12月10日

同 徳翁隆首座 元禄10丑四月9日

同 廉山中知藏 享保15戌5月7日

前安国 功拙完座元 明和2酉12月3日

前住当庵豊嶽鑑首座 天明6午10月28日

と、記されており、示寂年月の判明するものの中では、竹翁首座が当庵最古の人であることが知られる。

元禄5年（1692）4月10日、熊沢甚五太夫に提出した安国寺の「寺院改帳」にも「建立元年數不知、安国寺末寺以来 300年」としているが、これは「塔頭末寺37ヶ寺之内70年以来之寺1ヶ寺茂無之候仍証文如件」とする末尾の文から察せられるように、元和8年（1622）の新寺院建立

禁止を踏まえて、建立年数不明の寺院は、すべて末寺以来 300年としているので開闢ではない。

開山の寿峰格和尚は、老松山安國寺の6世であるから、天徳庵は「歴代記」及び過去帳に従う限り、竹翁首座が安國寺6世の寿峰和尚を請して開山とし、安國寺末になったと考えられる。従って、竹翁首座が実質的な開山であったと見てよからう。

享保8年(1723)8月1日、藩主松浦篤信は、安國寺末から国分と中野郷地区の国分寺、阿弥陀寺、三明院、桂林院、觀音寺、天徳庵、円福寺を分離させ、国分寺は由緒ある寺だからとて本寺となし、他の6ヶ寺を末寺として付属したのである。そこで、天徳庵も護國山国分寺末となった。

平戸の松浦史料博物館の記録によると、天徳庵の檀家は僅か12軒であり、すでに寛政10年(1798)の「壱岐國中人別帳」には住職の名前を認むることは出来ない。しかし玉岑珍庭元(弘化4年寂)により中興されたようであるが、明治初年に廃寺となり、觀音寺に合併された。

なお、当庵境内に壱岐國33ヶ所順礼札所のうち、千手觀音を同る32番の札所もあったが、同様に觀音寺に寄宿となっている。

(植 村)



京塚遺跡から天徳庵の跡を望む（後方の竹林の中）

図 版



京冢遺跡全景（西側から望む）

図版 2



南東側から望む



南西側から望む

調査風景



調查風景

図版 4



調査風景



西側から見る



第 1 号墓



西側から見る



南側から見る

第 2 号墓



西側から見る



南側から見る

第3号墓

図版 8



南側から見る（左側が第4号墓）



西側から見る

第4号墓・第5号墓



南側から見る



西側から見る

第 6 号墓

図版10



西側から見る



南側から見る

第7号墓



西側から見る



第9号墓

南側から見る

図版12



西側から見る



第10号墓

南側から見る

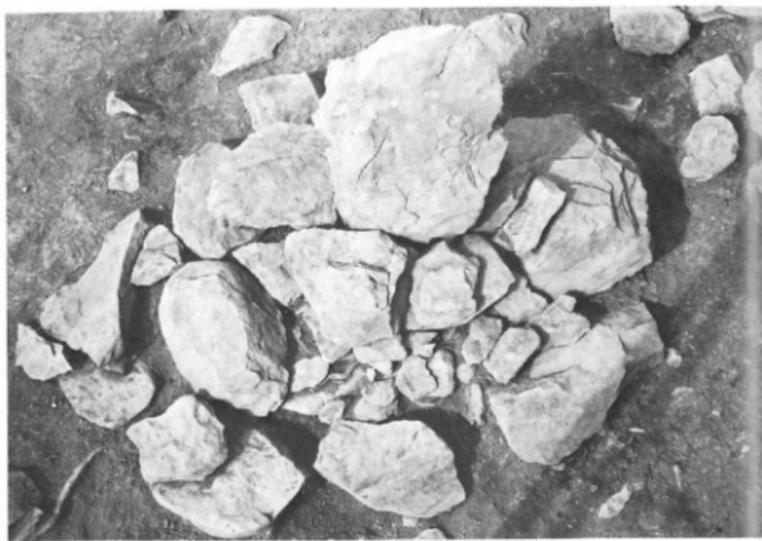


西側から見る



南側から見る

第11号墓



西側から見る



北側から見る

第12号墓



西側から見る



第13号墓



西側から見る



第14号墓

南側から見る



西側から見る



南側から見る

第15号墓



西側から見る

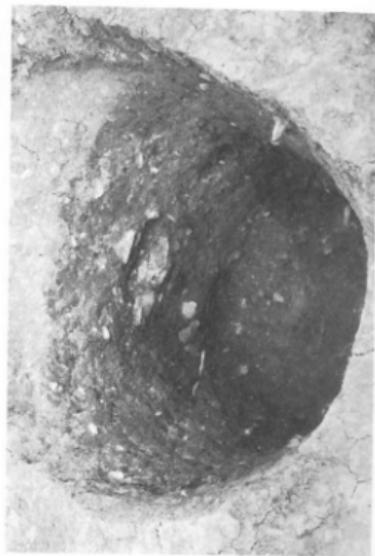


第16号墓

北側から見る

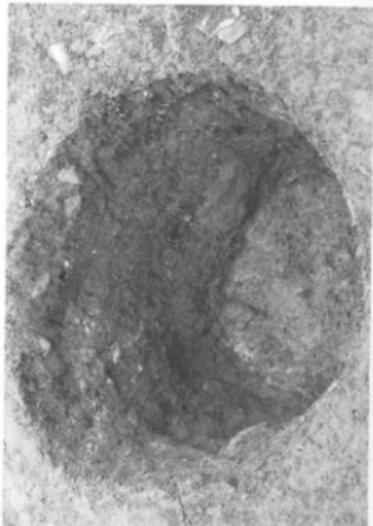


第1号墓



第4号墓

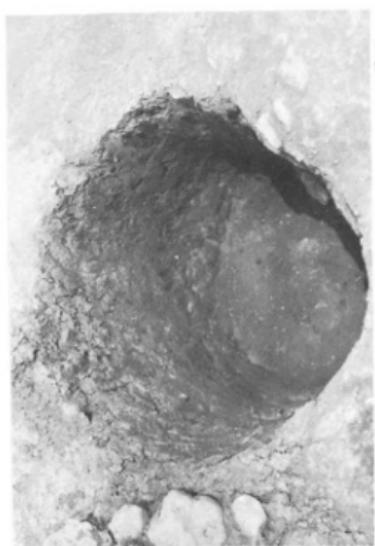
第5号墓



第3号墓

墓墙(1)

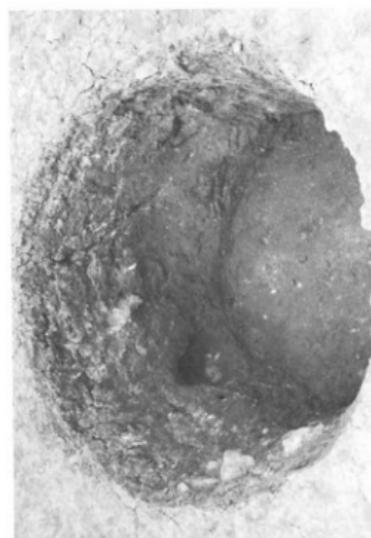
图版20



第9号墓



第14号墓



第6号墓



第7号墓
坑壁(2)



石塔・仏像形石塔

図版22



正面(1)



正面(2)



正面(3)



正面(4)



西側から見る

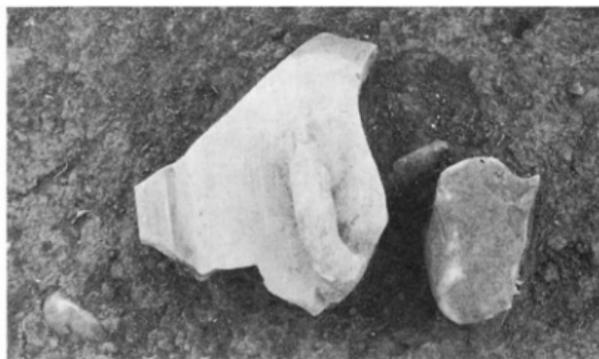
石組遺構



大土壤



備前焼鉢

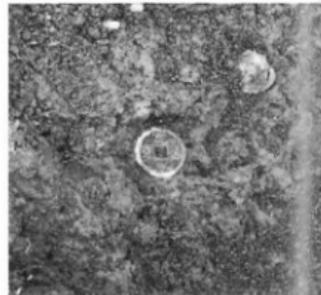


須恵器鉢

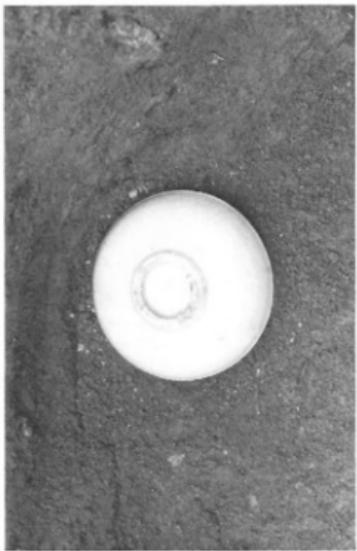


数珠

遺物出土状況(1)



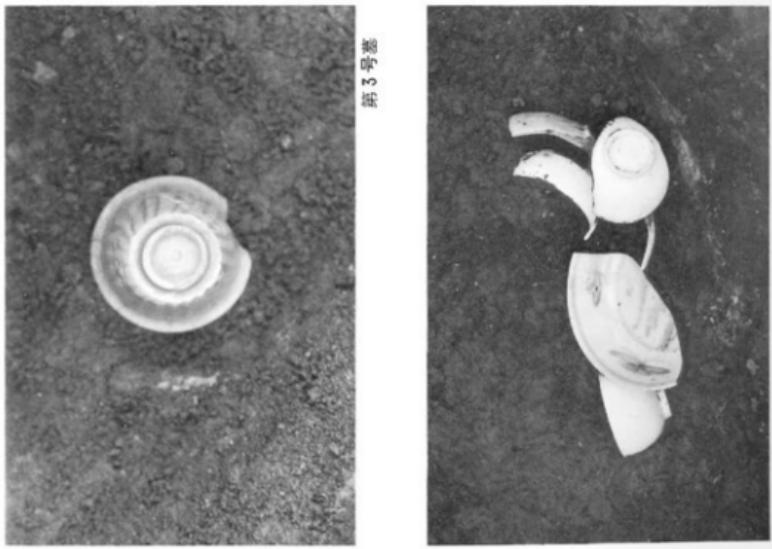
寛永通寶



第9号墓



第3号墓



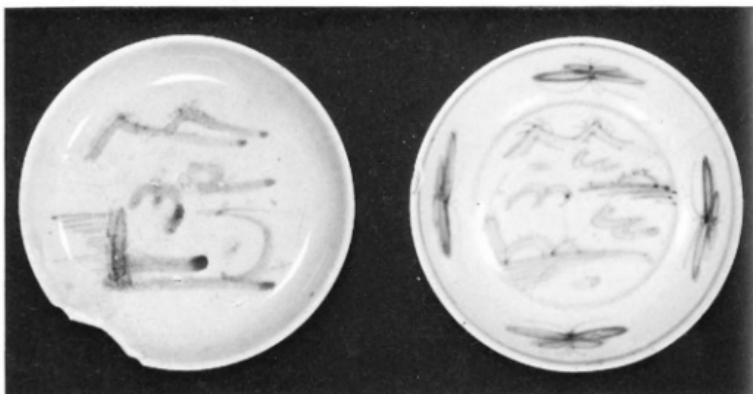
第9号墓

遺物出土狀況(2)

图版26



第3号墓

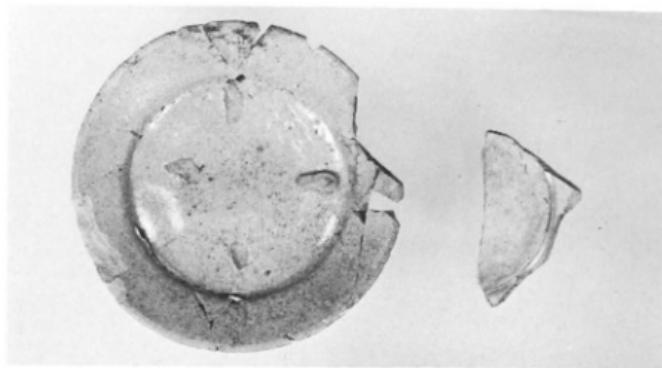


第9号墓

第14号墓



出土遗物（第3号墓·第9号墓·第14号墓）



第10号墓

第13号墓

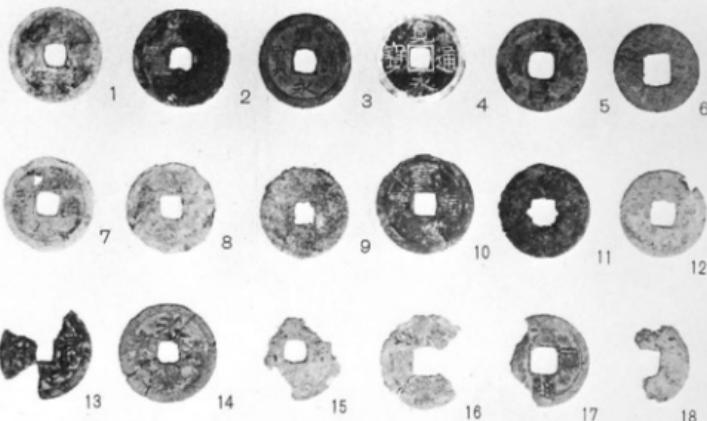


出土遗物（第10号墓·第13号墓）

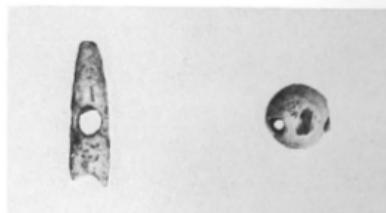


出土遺物（第13号墓）

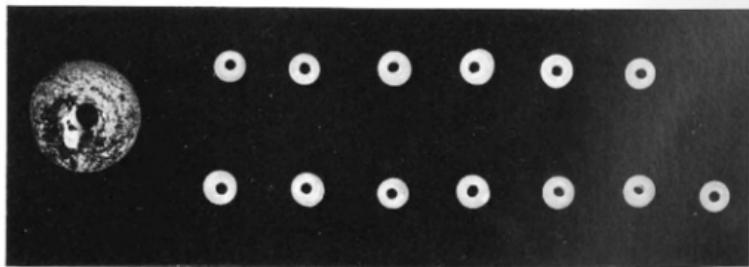
図版29



銅 錢

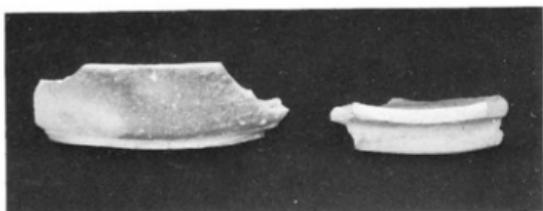


不明全属器

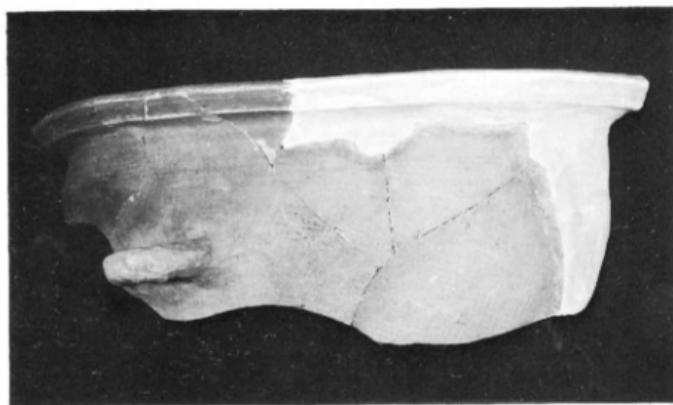


出土遺物

数 珠



坏

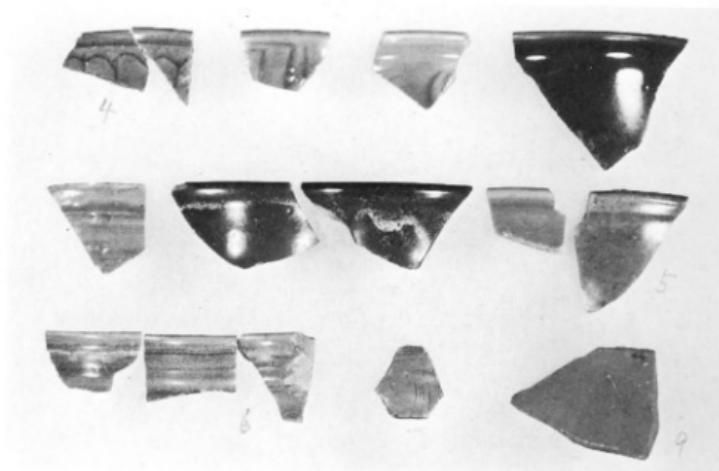


鉢

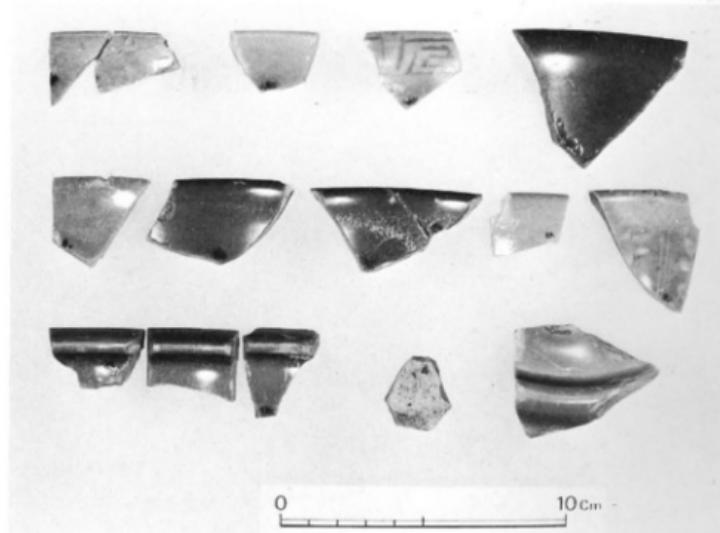


同上部分

出土遺物（須恵器）

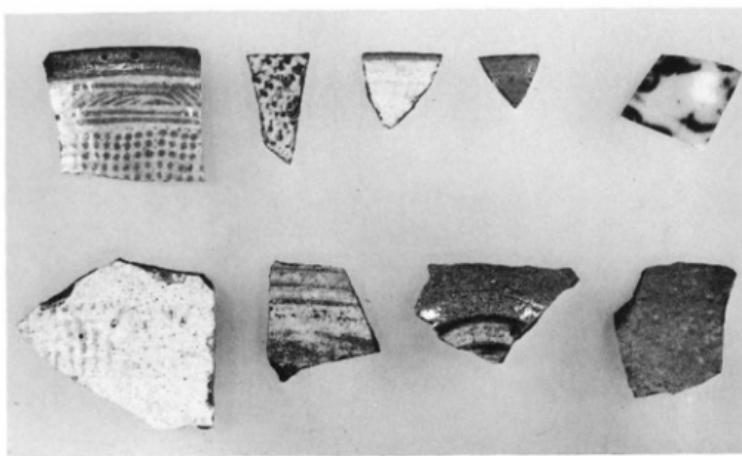


表

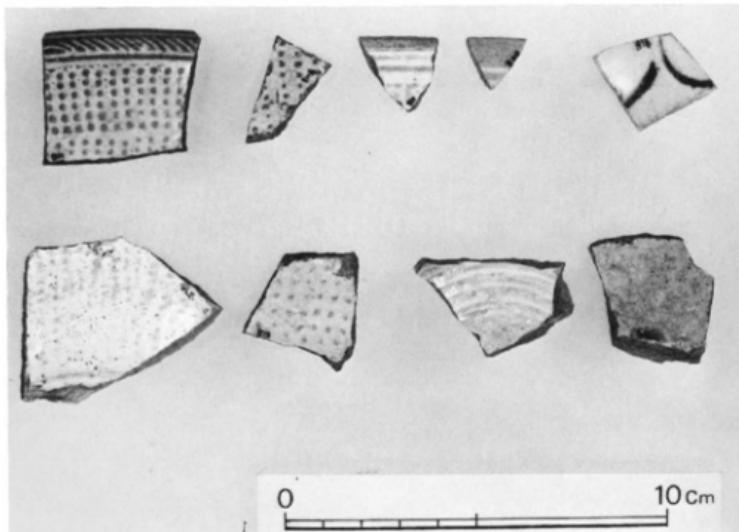


出土遺物（青磁）

同裏

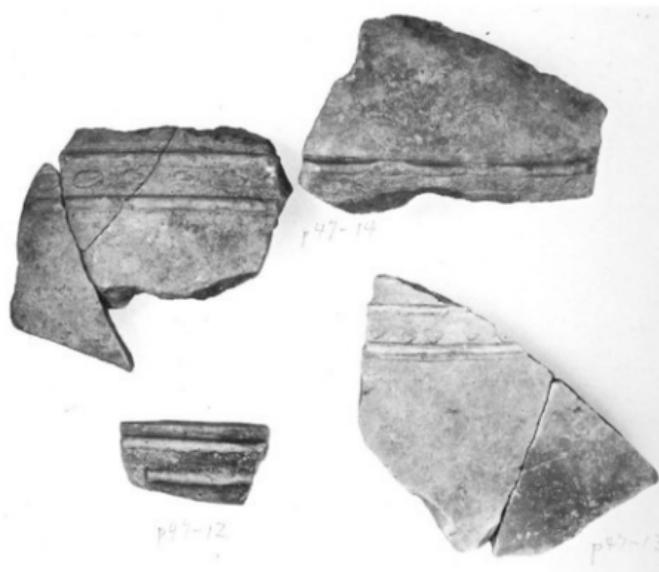


表



出土遺物（李朝陶器・明染付磁器）

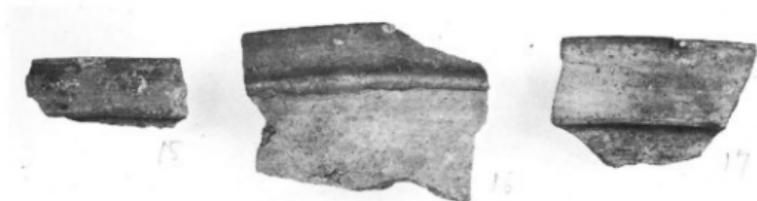
同裏



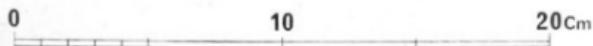
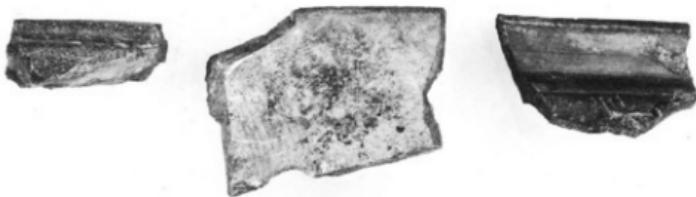
0 10 cm

出土遺物（土師質火鉢・青磁）

10 cm



表



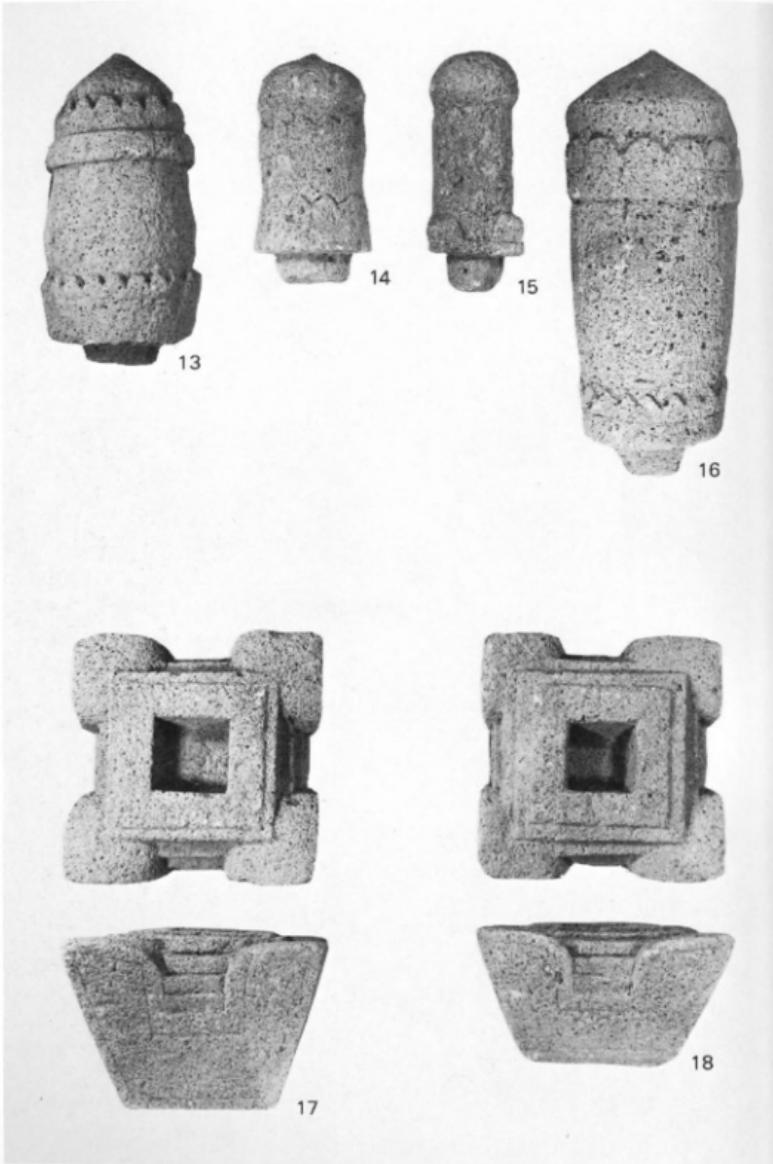
出土遺物（陶器・土師質土器）

同裏



番号は第30図、第31図の番号と一致する。

宝篋印塔 相輪(%)

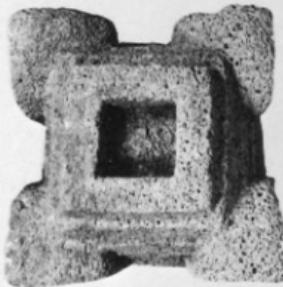


宝篋印塔 相輪・笠(1/6)

番号は第31図、第32図の番号と一致する。

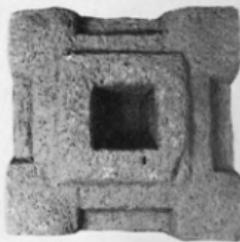
20.8.19

図版37



19

20



21

22

宝蓋印塔 竝(36)

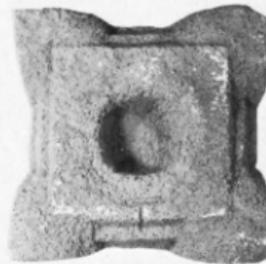
番号は第32図、第33図の番号と一致する。



23



24



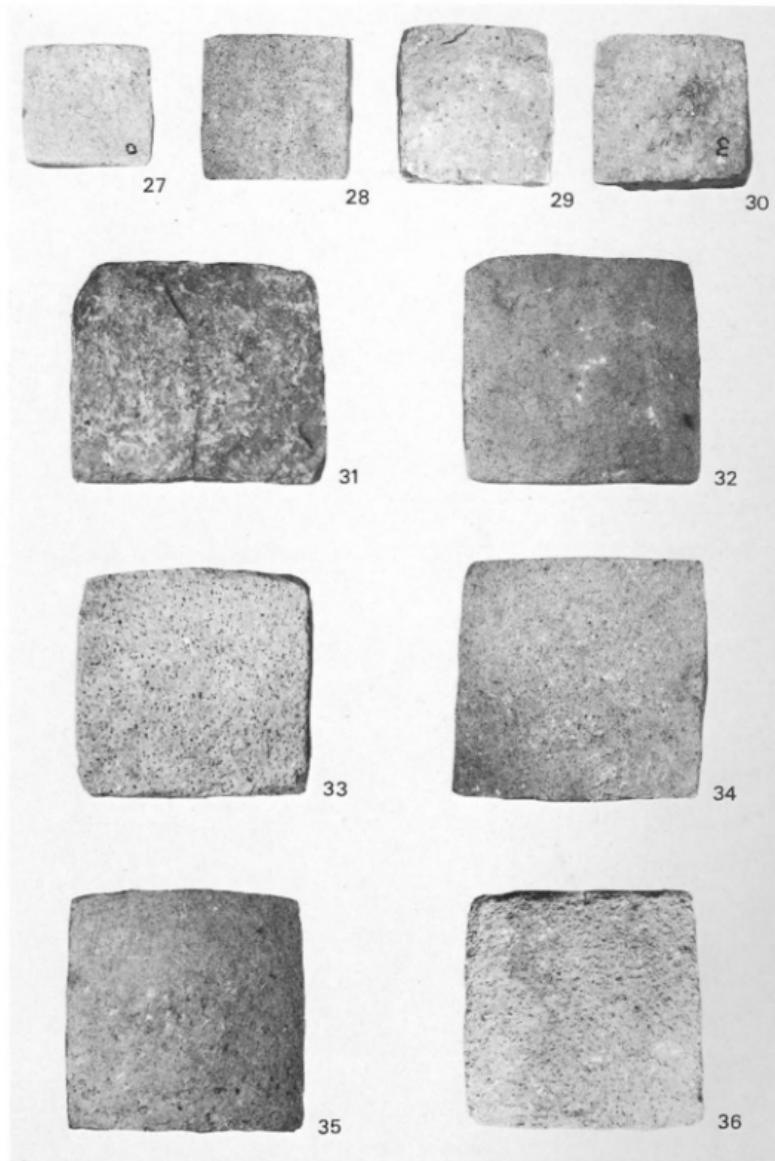
25



26

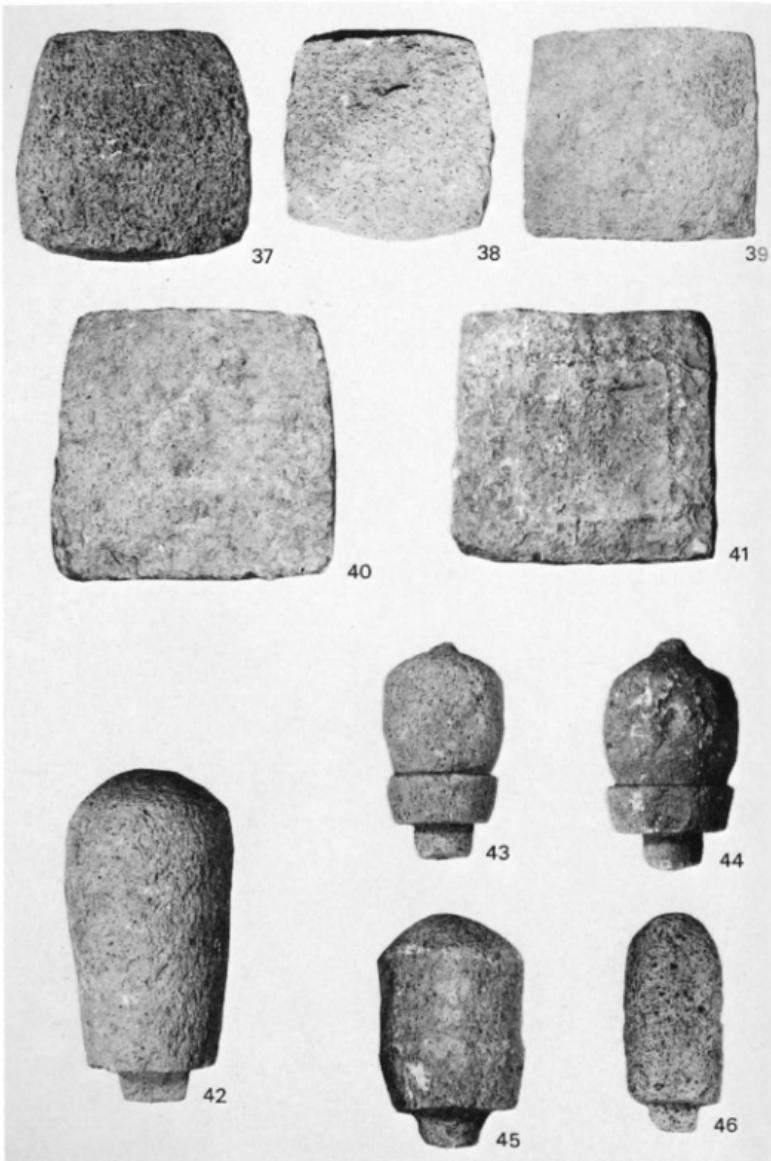
宝篋印塔 笠(%)

番号は第33図の番号と一致する。

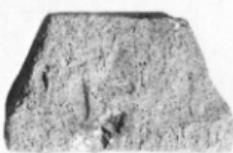
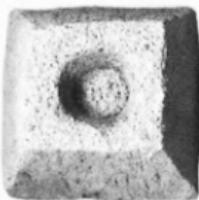


宝鏡印塔 塔身・基礎 (36)

番号は第33図、第34図の番号と一致する。



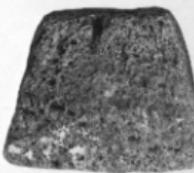
宝篋印塔 基礎・無縫塔 塔身・五輪塔 空・風輪(1/6) 番号は第34図、第35図の番号と一致する。



47



48



49



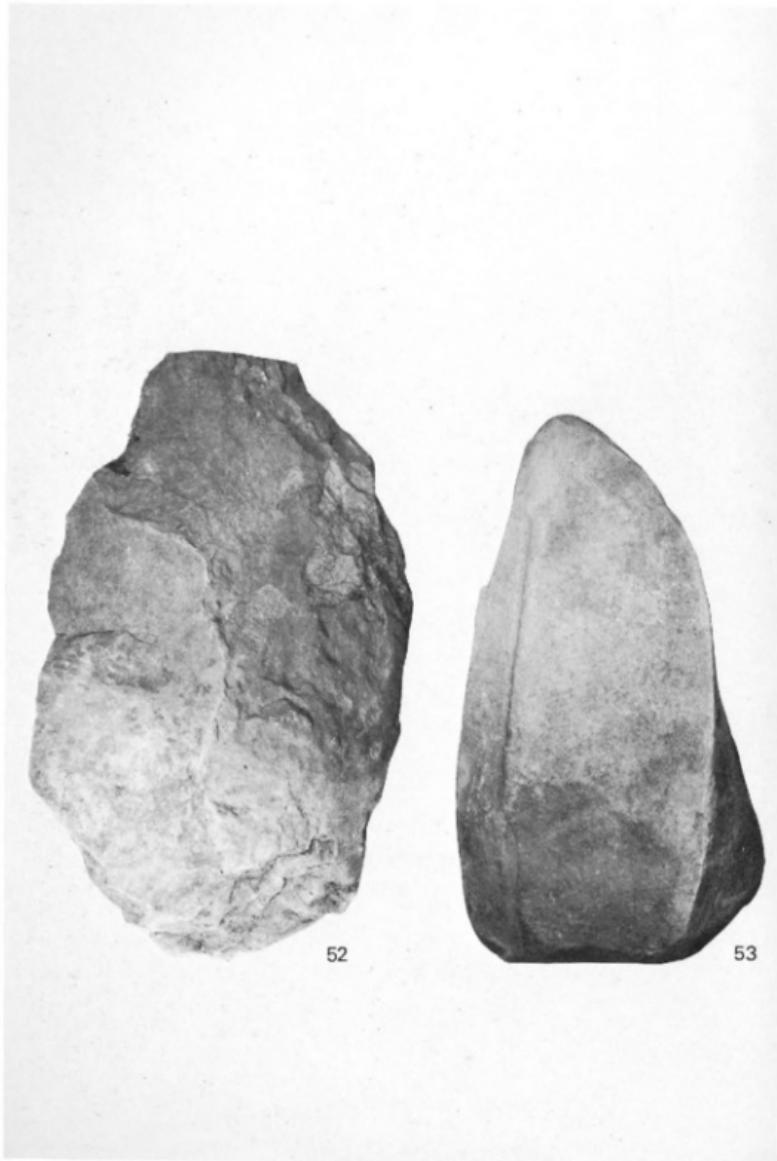
50



51

五輪塔 火輪・水輪・石塔部分・自然石板碑(%)

番号は第36図、第37図の番号と一致する



自然石板碑(36)

番号は第37図の番号と一致する。



調査終了時の状況



調査に参加した人達

芦辺町文化財調査報告書 第1集

京塚遺跡

昭和58年3月31日

発行 長崎県芦辺町教育委員会
〒811-53 芦枝郡芦辺町芦辺浦瀬の上524

印刷 株式会社 隆文社
佐世保市瀬戸越町260